



幼子のために祈れ

堺栄光教会

高橋 頼 男

「町のかどで、飢えて息も絶えよとする幼
子の命のために、主にむかって両手をあげよ。」
哀歌 2・18、19

京都、山崎に「水上隣保館」を訪ねました。
日本で最大級の収容人数の児童養護施設です。
1931年、中村遙・八重子夫妻が、大阪港のはしけ
に住む水上生活者の子を見かねて引き取ったと
ころから始まりました。1952年に現在地に移り、
現在、老人施設を含む総合施設となっています。
乳児から高校3年生まで228人が共同生活を送っ
ています。以前は親のない子どもたちが送られ
てきました。今は、親のいる子が送られてきま
す。「ネグレクト」（育児放棄）や「虐待」（虐待
に共通するのは、自分にとっていい子であって
ほしいという親の身勝手、子どものころ虐待さ
れた親が子を虐待する・虐待の連鎖）等、理由
は様々ですが、親がもはや自分の子どもを育て
ることが出来ず家庭が崩壊しているところから
来ています。隣保館では近隣の市に出張所を設
け、子育てが出来なくなった親の駆け込み場所
のような施設を造り、親子崩壊や家庭崩壊を水
際で食い止めようと試みていました。案内をし
てくださった保母さんは、早朝から深夜まで続
くすさまじい格闘（働き）の一端を、たんとと
話してくださいました。接した子どもたちは一
応に明るく、人懐っこくて天真爛漫（てんぜんらんまん）に見えまし
た。しかし、多くの傷をもっている彼らの現実
や将来は、決して明るいものではないようです。
紀元前586年、ついにユダが減びます。エシ
ミヤは、哀歌2章において、親が生きているために犠
牲になる子ども（20）、母の懷の中で飢えて死ん

でいく子ども（11、12）、道端で息も絶え絶えに
なって弱り果てている子ども（19）のことを指
摘しています。国が罪のゆえに滅び、社会が音
をたてて崩壊する中でまず、一番弱い子どもた
ちが犠牲になります。現代社会においても、子
どもたちが犠牲になっています。毎日のように
子どもの事件が報じられています。この時代、
この国、身近なところで、表面に現れない子ど
もも含めて何と多くの子どもたちが痛めつけら
れ、傷つき、殺され、犠牲になっていること
でしょう。

私たちの無力さを覚えます。果たして教会に
何が出来るだろうかと考えます。今、教会に來
ている子どもたちの現状を知り、その家庭のケ
アまで出来ているだろうかと反省させられます。
何もかも手一杯で、教師が足りない、信仰も祈
りも情熱も足らないという現実の中で、新しい
祈りやビジョンが生まれることは難しいこと
です。しかし、み言葉は、「すべて道行く人よ、あ
なたがたはなんとも思わないのか」（1・12）と、
見て見ぬ振りをしている無関心を問い、まず「あ
なたの幼子たちのために祈れ」と命じています。
どうしたらよいでしょう。「良きサマリヤ人のた
とえ」（ルカ10・29〜37）の中に手がかりがあり
ます。まず、祈ることから始めましょう。そし
て、気になりながらもこれまで避けて見て見ぬ
ふりをしていた現状に、しっかりと向かい合いま
しょう（31、32）。助けのための必要を数え、犠
牲を払う覚悟をしましょう（34、35）。主の憐れ
みに突き動かされ（33）、「あなたも行つて同じ
ようにしなさい」（37）とのみ言葉に従いましょ
う。

牧羊者

目次

巻頭言	1
教師養成講座 旧約聖書丸ごと早わかり(2)	3
初めの教会 《七月教案》	9
戦う教会 《八月教案》	24
パウロの伝道 《九月教案》	36
牧羊ひろば（札幌羊ヶ丘教会）	48
おわりに	50

教師養成講座

旧約聖書丸ごと早わかり(2)

鎌野 直人

はじめに

旧約聖書は四つの部分、五書（創世記から申命記）、歴史書（ヨシユア記からエステル記）、詩歌（ヨブ記から雅歌）、預言書（イザヤ書からマラキ書）に分けられます。今回は、歴史書のヨシユア記から列王紀の部分を概観してみよう。

I ヨシユア記

（内容）

モーセの死（1・1）から始まり、ヨシユアの死をもって終わっている（24・29）ヨシユア記は、イスラエルによるカナン征服を叙述しています。主の言葉に従って律法を守る者たちに勝利が与えられ、彼らの上に主の約束が現実となることがその中心メッセージです（1・7）。

（分解）

1 約束の地の征服（1～12章）

本書の冒頭で、主はイスラエルの指導者になったヌンの子ヨシユアに「勇気を持って主の律法に

従え、そうすれば勝利を得ることができる」と語られました。それは、モーセの存在よりも大切な

のは、共に進まれる主への従順だったからです。そこで、イスラエルは主の言葉に従い、主の臨在をあらわす契約の箱を先頭にヨルダン川を渡り、更に戦いの直前には割礼を行いました。主の言葉どおりにエリコの城壁の回りを行進した民は、その町を完全に滅ぼし尽くすことができました。

ところが、アカンが主の言葉に従わなかったために、民はアイの町を滅ぼすことはできません。そこで、民は主の言葉に従うことを確認した上でアイを再攻撃し、それを陥落させました。この勝利のうわさを聞いたギベオンの住人は戦うことを放棄し、イスラエルに降伏しました。さらにイスラエルは、南方の町（のちのユダ）の王たちに勝利し、北方の王たちをも滅ぼし尽くしたのです。

2 約束の地の分配（13～21章）

老齢のヨシユアはイスラエルの12部族それぞれに土地を分配しました。マナセの半部族、ルベン族、ガド族はすでにモーセからヨルダン川の東の地を分配されていきましたから、ユダ族、エフライム族、マナセの半部族に土地が与えられ、残りの

7部族には、くじによって土地が割り当てられました。なお、この時に分配されたのは、すでに獲得した土地だけではありません。これから獲得すべき土地も含まれていました。約束の地を獲得する戦いはまだ終わってはいません。

3 将来への警告（22～24章）

最後に、勝利を続けてきたイスラエルに対して、主に従い続けなければ必ず敗北が訪れることをヨシユアは警告しました。そして、主を捨てた時に襲いかかる悲劇を彼は民に伝え、主の律法への従順を民に誓わせて、ヨシユア記は幕を閉じます。

II 士師記

（内容）

ヨシユアの死から始まり、サムエルの誕生の直前までを士師記は描いています。主の言葉に従った勝利の記録をヨシユア記とすれば、主の言葉に従わなかったために味わった敗北の記録が士師記です。

士師記に描かれているイスラエルの姿には一つのパターンがあります。まずイスラエルが主を捨てて他の神々に仕えること、それゆえに主の怒りが燃え、敵の手にイスラエルが渡されること、イスラエルが主に呼ばれること、主がさばきづかさを起こされてイスラエルを救われること、敵はイスラエルの手に服し、平安が国に訪れること、そして再度イスラエルが他の神々に仕えること。こ

のパターンに表されている民の背教と主のあわれみが士師たちの活躍の記録で繰り返されています（2・11〜23参照）。

（分解）

1 未征服の地（1・1〜2・5）

ヨシユアは死にましたが、約束の地全てをイスラエルが征服した訳ではありません。そこで、民は継続してカナンに住民たちと戦いました。しかし、残念ながら彼らを追い出すことができません。その結果、カナンの地の住民たちをその地から完全に追い払うことはしない、と主も宣言されます。

2 士師たち（2・6〜12・15）

残念ながら、残されたカナンの地の住民たちはイスラエルの畏（おそ）れとなりました。そして、民は背教による圧制と悔い改めと従順による回復の歴史を繰り返すこととなります。

戦闘の指導者としてイスラエルを救いに導いた5組のさばきつかさの姿がここには詳しく描かれています。クシャン・リシャタイムの手から救い出したオテニエル、モアブの王を暗殺した左利きのエホデ、カナン王ヤビンと戦った女預言者デボラとアビノアブの子バラク、ミデアンの手からイスラエルを解放したギデオオンとその子アビメレク、そしてアンモンびとと戦った勇士エフタです。この他に、さばきつかさとして5人の名が挙げられています。

士師記に登場するさばきつかさたちは、決して立派な人格をもっていたわけではありません。女預言者デボラが共に行くことを切に求めたバラク、なかなか主の招きに応えられなかっただけではなく、人を恐れて夜中にしかバアルの祭壇を撃ち壊せなかったギデオオン、父が断った王となるという誘惑に打ち勝てなかったアビメレク、民の間で不一致を生み出し、主への誓願のゆえに自分の娘を燔祭（はくさい）としてささげたエフタ。しかし、主はこれらの人々を用いて、主の救いを実現されました。主のふところの深さを見ることが出来ます。

3 サムソン（13〜16章）

さばきつかさのなかで一番詳細に描かれているのがサムソンです。その両親の信仰の姿は、彼の誕生にまつわる出来事の中に顕著です。しかし、サムソン自身は決して模範的なイスラエルの民ではありませんでした。個人的な復讐（ふくしゅう）に基づいた略奪と放火を繰り返し、遊女のところに通い、ペリシテの女デリラの策略に乗って自らの秘密を教えてしまったからです。むしろ、サムソンの記事は、イスラエルがどれだけ社会的に、倫理的に荒廃していたかを私たちに語っています。しかし、主はそんなサムソンの怪力を用いて、ペリシテ人の圧制からイスラエルを救われました。主のわざの不思議を覚えるばかりです。

4 王なき民の無秩序（17〜21章）

イスラエルの民の荒廃は本章でクライマックスに達します。偶像崇拜、強奪、旅人への配慮なき行動、強姦（ごうかん）、殺人、そしてイスラエルの民の間の内紛によるベニヤミン族絶滅の危機。王がいないために、民の間に無秩序が蔓延（まんえん）しました。主の言葉に聞き従わない民の経験した暗黒時代です。ヨシユアの死後、下り坂を転げ落ちた民は、落ちる所まで落ちてしまいました。

III ルツ記

（内容）

「さばきつかさが世を治めているころ」（1・1）、つまり士師記に描かれている時代を背景に、イスラエルの王ダビデの先祖に現された主のいつくしみがルツ記には描かれています。

異郷の地モアブで夫と二人の息子に先立たれたベツレヘム出身のナオミは、失望と苦しみの中に故郷へと帰ろうとしました。その時、彼女の息子の嫁であったモアブ人ルツは、「あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神」（1・16）と告白して、ナオミと共にベツレヘムに戻りました。

大麦の収穫の時、その落ち穂を拾っていたルツは、偶然にもナオミの夫エリメレクの親戚であるボアズの畑に来ました。そこでルツはボアズから十分な大麦が与えられました。ルツとボアズのこの出会いは決して偶然ではありません。いつくしみに満ちた主の摂理的な巡り合わせでした。

主のみわぎに気がついたナオミは、大麦の打ち場で寝ているボアズに求婚するようルツに命じました。ボアズがルツを妻とすることによって、失われる懸念のあるエリメレクの嗣業^{しぎょう}をあがなう道が開かれることを彼女が願っていたからです。ルツは姑^{しゅうふ}の言葉どおりに行いました。そして、ルツのナオミに対するいつくしみの姿を見たボアズは、彼女との結婚に同意しました。しかし、ボアズよりも近い親戚がいるため、まだすべての問題が解決した訳ではありません。

そこで、様々な裁きの場として定められていた町の門において、ボアズは親戚の人にエリメレクの土地をあがなうか、と尋ねました。ルツもその土地と共にあがなう必要があることを知った親戚の人はそれを辞退し、ボアズが正式にエリメレクの嗣業とルツをあがなうことができるようになりました。そして、ボアズからダビデの祖父にあたるオベデが誕生したのです。

ルツ記は、エリメレクの一族に対する主のいつくしみとルツのナオミに対するいつくしみが出会った時に起こった奇跡の記録です。そして、主の摂理的なわざは、混乱の民に秩序をもたらす王の誕生に道を備え、異邦人にも広がる主のいつくしみをあざやかに現したのです。

IV サムエル記上下

(内容)

最後のさばきつかさであるサムエルの誕生から始まり、イスラエル王国の王であるサウルとダビデの時代について描いているのがサムエル記です。王なき民に蔓延^{まんえん}した混乱と外敵(特に海岸沿いに住むペリシテびと)の襲来から民を救い出すために、王制がイスラエルに敷かれ、国に秩序が回復されます。同時に、弊害も生まれてきました。

(分解)

1 サムエル(上1〜8章)

サムエル記は、士師記の終わりに描かれていた暗黒時代から始まります。王のいない国に秩序はなく、人々はほしいままに生きていました。シロにある幕屋に仕える祭司エリの息子たちもそうでした。主へのささげものを自分たちの思うままに扱うことにより主を汚していたからです。主からの言葉さえもまれとなつたこの時代、イスラエルはペリシテびととの戦いで敗北し、主の臨在をあらわす神の箱さえも奪われていきました。

そのような中で、長く子どもが与えられずに苦しんでいたハンナに、主はサムエルを与えられました。彼こそがイスラエルに備えられた光です。主は、ナジル人として幼い頃から幕屋に仕えていたサムエルにエリ一家の没落を予告し、彼を主の預言者としてイスラエルに立てました。

成人したサムエルはイスラエルのさばきつかさとなりました。そして、彼の勧めに従って偶像を捨てたイスラエルは、宿敵ペリシテびとに勝利し

ていきます。しかし、ペリシテびとからの侵攻は止まりません。そこで、戦闘における指導者となる王を立ててほしい、と民はサムエルに懇願しました。そのような要求は主への重大な罪である、とサムエルは警告を与えますが、人々は彼の声に耳を傾けません。

2 サムエルとサウル(上9〜15章)

主はついに人々の要求を受け入れられました。主はサムエルを遣わし、ベニヤミン族のサウルをイスラエルの初代の王として立てるために任職の油を注がせました。このことは当初秘密とされていましたが、サムエルはイスラエルのすべての部族の前でくじを引き、民の前でサウルを王として任命しました。当初、民から王として受け入れられていなかったサウルでしたが、ヤベシ・ギレアデをアンモンの手から救い出すことによって全イスラエルから王として認められました。ついにイスラエルに王制が始まったのです。

ところが、イスラエルは新しい時代を迎えるだろう、という期待をサウルは見事に裏切りました。主の言葉を心して守るべきであったのに、ペリシテびとと戦う民が離散することを恐れて、到着が遅れたサムエルに替わってサウルは主へ犠牲をささげてしまったからです。さらに、サウルが無謀な誓願を立てたため、主への信仰に堅く立つて勇敢に戦いを進めていたヨナタンの命を危機にさらしました。そして、「アムレク人のすべての持ち物

を滅ぼせ」という主の命を軽視し、最もよいぶんどりものを残したことが最後のとどめとなりました。彼は主を恐れず、むしろ民を恐れたからです(15・24)。主はサウルを王としたことを悔い、別の王を立てられることを決意されました。

3 サウルとダビデ (上16章～31章)

主が選ばれた次の王は、ベツレヘムに住むユダ族エッサイの末の子ダビデです。サムエルは彼の頭に油を注ぎ、ダビデには主の霊が留まるようになりました。その一方で、サウルから主の霊は離れ、むしろ悪霊が彼を悩ますようになりました。

ダビデはその音楽の才能、さらにはペリシテびとゴリアテとの決闘における勝利を通して、サウルの王宮と深く関わるようになります。サウルの息子ヨナタン、娘ミカル、そしてイスラエルの民はダビデを愛し、主が彼と共にいることに気がついていました。しかし、ダビデの人気を嫌ったサウルは、幾度も彼を殺そうと試みますが、サウルの息子や娘の助けによってダビデはそこから救い出されます。

ダビデが台頭する一方で、サウルが王として不適任であることが一連の出来事でさらに明らかになされていきます。ダビデをかくまったという理由でサウルは祭司の一家を皆殺しにしました。更に、主が彼の祈りに答えられないため、口寄せの女を用いて死んだサムエルを呼び起こしました。ついにギルボア山でのペリシテ人との戦いにおい

て、サウルは敵によってひどく傷を負い、自害してしまいます。

ダビデは逃亡者として各地を転々としていましたが、様々な戦いにおいて勝利を獲得していきました。また、二度もサウルを撃つ機会があったにもかかわらず、ダビデはそれらの機会を用いませんでした。それは「主が油注がれた王を撃つてはならない」との確信に彼が立っていたからです。

4 祝福の下にあるダビデ (下1～10章)

サウルの死後、ダビデは主の言葉に従ってヘブロンへ上り、そこでユダの家の子として油注がれました。その一方で、サウルの子であるイシボセテは、北の部族たちによってイスラエルの王として立てられます。しかし、ダビデとの戦いの中でイシボセテの力は弱り、ついには彼の軍勢の長アブネルと共に暗殺されてしまいました。

ついに、ユダ族のみならずイスラエルのすべての部族がダビデを全イスラエルの王と認めるようになりました。即位後、ダビデはエブスびとが住んでいたエルサレムを取り、そこを都とし、ペリシテびととの戦いにおいて連戦連勝を経験します。彼の王としての地位は堅くなり、主もまたダビデを祝福されました。ですから、神の箱を都エルサレムにかき上ることをきっかけに、預言者ナタンを通してダビデ王家の祝福を主は宣言されました。羊飼いであったダビデをイスラエルの王とした主が、その子孫に長く王の位を与えることを約束し

てくださったからです。

5 呪いの下にあるダビデ (下11～24章)

順風満帆と思われていたダビデですが、あるひとつの事件をきっかけに彼の生涯は下降線をたどっていきます。ダビデは、ウリヤの妻バテシバを奪い取り、姦淫の罪を犯し、王に対して忠実なウリヤを自らの権力を用いて殺しました。最大限の権力を持つ王が、その権威を乱用したのです。預言者ナタンはその罪を指摘し、ダビデも自らの罪を認めました。しかし、この罪から生み出された呪いは、ダビデ一族に暗い影を投げかけるのです。

一族を襲った悲劇は、ダビデの娘タマルを腹違いの兄アムノンが強姦したことから始まりました。タマルと同じ母をもつ兄アブサロムは、妹の復讐としてアムノンを殺しました。さらに、アブサロムは謀ってダビデに反旗を翻し、自らが王となったことを宣言し、父をエルサレムから追いやったのです。しかし、アブサロムはヨアブによって殺され、この反乱に幕が下ろされます。幸運にも、国はダビデの手の中で修復されますが、ダビデは自らのまいた種を刈り取らなければなりませんでした。

サムエル記には人間のわざの限界が描かれています。サムエルは自分の子を律することができず、最初の王サウルは主に従いませんでした。ダビデでさえ、自らの権威を乱用して、自らの家族を含めた多くの人を傷つけていました。しかし、そ

のような人さえも用いてイスラエルの王国を堅くされたのは、ダビデを選び、ダビデを多くの敵から救われた主です。人の思惑を超えてその御心を現実にされる「主は生きておられ」（22・47）です。

V 列王紀上下

（内容）

ダビデの死から始まり、統一王国が分裂し、ついに滅亡する歴史が列王紀には綴られていきます。本書は「なぜ主が立てられた王国が滅亡したのか」という疑問に対する明確な答えを示すために書かれています。イスラエルはエジプトから救い出してくださった主の言葉に従わなかった、だから王国は滅亡したのです（下17・7～10）。

（分解）

1 統一王国（上1～11章）

ダビデ王が年老いた時、アドニヤは次の王を狙って画策しました。しかし、主の預言どおりソロモンが即位し、ダビデの死後、アドニヤを支持した人々は粛正されます。

即位当初、ソロモンは真心をもって主を愛していました。そこで、主は他に並ぶ者のない知恵を彼に与えたのみならず、驚くほどの富をも備えられました。さらに、父ダビデに主が約束されたように、ソロモンは主の神殿をエルサレムに建築し、そこに主の契約の箱を収めます。主はささげられ

た神殿にその栄光を満たし、主の名がそこに置かれていた祈りと礼拝の場としてそれを受け入れられました。

そのような栄光の中で、ソロモンは諸国との交易を通して富を獲得しました。ところが、これが彼の罠となったのです。交易を円滑に進めるためにソロモンは外国人の妻を多く持つようになり、彼の心は主から他の神々へと転じていきます。その結果、ソロモンの死後にイスラエル王国を二つに裂くと主は宣言されますが、ダビデのためにその王家を残されるというあわれみをも示されました。

2 二つの王国（上12章～下17章）

①王国の分裂（上12～16章）

ソロモンの死後、その子レハベアムは愚かにも強制労働をさらに増やすと民に宣言しました。その結果、イスラエルの民はレハベアムを王とすることを拒絶し、国はユダ王国（南王国）とイスラエル王国（北王国）に分裂し、レハベアムは南王国の王に留まりました。一方で、北王国の王となったヤラバアムは、民がエルサレムの神殿に上ることを止めるために、ベテルとダンに金の子牛を置き、これらを北王国の礼拝所としました。しかし、これは主の命に背いた罪です。続く北王国の王たちもこの罪から離れることなく、ついに主はイスラエルを捨てることを宣言されました。

南王国には一時的な宗教改革がアサ王によって

もたらされました。しかし、北王国はヤラバアムの罪を離れることはありません。クーデターによりヤラバアム一族は滅び、オムリ一族が王位を握るに至ります。確かに北王国はオムリ一族の統治下で経済的には発展します。また、サマリヤが新たに都として選ばれます。しかし、主への信仰の観点から見ると、オムリ一族はヤラバアム一族となんの違いもありませんでした。そればかりか、オムリの子アハブとその妻であるイゼベルがカナンの神であるバアル礼拝を進めた結果、信仰の観点から見た暗黒時代が北王国に訪れました。

②北王国と預言者（上17章～下8章）

北王国の暗黒時代は同時に預言者の全盛期でした。北王国の王家であるアハブ一族、その不従順とバアル礼拝に対抗して、主はエリヤとエリシャを始め多くの預言者を起こされました。それは主に敵対するあらゆる存在に対する主の完全な勝利を示すためです。バアルの預言者たちとの戦いではエリヤを通して、スリヤとの戦いでは（驚くことに）不従順なアハブを通して主はその力を表されました。また、ナボテのぶどう畑を奪うというイゼベルの不正に対して厳粛な裁きを主は予告され、アハブは預言者の言葉どおりスリヤとの戦いで命を落とします。さらにアハブの子アハジヤもエリヤの言葉どおりに病から回復せず死んでいきました。更に、アハブの子ヨラムが王であった時代、主は渇水、飢え、死、病、強敵に対する勝利

をエリシャを通して与えられました。

③クーデターと改革（下9～12章）

バアル崇拜が蔓延した北王国にクーデターを起こしたのは、預言者によって主の御心を知らされたエヒウでした。彼はイゼベルとアハブの子どもたちを処刑することによってバアル崇拜者を一掃し、北王国の王権を自らのものとししました。しかし、彼もヤラベアムがはじめた金の子牛礼拝を廃止しませんでした。

アハブの娘であるアタリヤは南王国の王家に入り、南王国にバアル崇拜を蔓延させました。そして、息子であるアハジヤ王が若くして死んだ時、王家の子孫を抹殺して自らが南王国に君臨したのです。しかし、祭司エホヤダと幼い王ヨアシによって彼女の野望は打ち砕かれました。その後、成人したヨアシはエルサレムの神殿の修復を行い、主への礼拝を復興させました。

④サマリヤ崩壊（下13～17章）

預言者エリシャの死（13章）以降、両王国の王については短い記録が続くのみです。たとえば、北王国の経済的最盛期の王ヤラベアムについてはわずかな記述に留まっています（14・23～29）。やがてメソポタミアの大国アッシリヤはその影響力をイスラエルにまで伸ばし、北王国の民の一部が捕らわれて、国を離れます（15・29）。

ついに北王国の滅亡の日が到来します。親アッ

シリヤの方針で進んでいた南王国をスリヤ王レジンと北王国の王ベカが攻めた時、逆にスリヤはアッシリヤによって滅ぼされてしまいました。そして、ホセア王の時代、北王国はアッシリヤに再度背き、首都サマリヤは完全に破壊されます。北王国滅亡の原因は明白です。それは主の定められた律法に従わず、他の神々を拝み、ヤラベアムが設置した金の子牛の礼拝をやめなかったからです。このようにして、主の言葉は確かに成就しました。

3 ユダ王国（下18～25章）

①不従順と改革（下18～23章）

北王国滅亡後、南王国は残りました。それは主がダビデに対して約束されたからです（サムエル下7章）。また、アッシリヤが勢力を伸ばしている時期に、南王国には主を信頼する王がいたからでもあります。ダビデに並ぶ善王と記されているヒゼキヤは「われわれは、われわれの神、主を頼む」（列王紀下18・22）と告白し、アッシリヤに最後まで立ち向かいました。そして、王国の多くの町が廃墟となる中、エルサレムは最後まで陥落しませんでした。なお、ヒゼキヤの確固たる信仰の背後には預言者イザヤをとおして語られた主の言葉があります。

しかし、ヒゼキヤの子マナセは父とは全く逆の行動をとり、偶像礼拝の罪を犯しました。その結果、主は南王国も滅ぼすと宣言されます。その一方で、続くヨシヤ王の時代、主の律法の書物が神

殿から見つかり、それに則ってヨシヤは国の改革を行い、偶像崇拜を取り除きました。王のこの信仰ゆえに、主は国家の滅亡の日をわずかではありませんが遅らされます。

②エルサレム崩壊と捕囚（下24～25章）

ヨシヤ王の死後、アッシリヤにかわってバビロンが勃興し、ついにユダ王国にまでその侵略の手を伸ばしてきました。一時はバビロンに隷属していたエホヤキム王は翻って反逆し、その結果、次のエホヤキン王の治世にエルサレムはバビロン軍に包囲されてしまいます。そして、王はバビロンに降伏し、第一次バビロン捕囚が行われました。続くゼデキヤ王（ユダ最後の王）は、バビロンによって立てられたにもかかわらず、後にそれに背きます。その結果、バビロンの軍勢によってエルサレムの城壁は破壊され、町は火で焼かれて廃墟と化しました。ダビデから始まった王国は滅亡し、神殿は跡形も無くなり、王は途絶え、人々はバビロンへと捕らえ移されました。すべての希望が崩れました。

しかし、そのような中でも列王紀下はエホヤキンがバビロンにおいて獄屋から出された記事をもつて終わっています（25・27～30）。二つの王国の悲劇の書は幕を閉じますが、主の憐れみのみわざはもうすでに始まっていることが示唆されています。主に希望を置く者を主は見捨てられません。

聖書 使徒3・15・10 テーマ 美しの門

序論

(鎌野)

聖霊降臨によって誕生した教会には、ペンテコステの日だけでも3千人が加わった。それだけでも驚くべきことだが、さらに「多くの奇跡としるしとが、使徒たちによって、次々に行われた」(2・43)。もちろんこれらのことは、人の能力によってなされたことではなく、聖霊の働きであった。その多くの奇跡のうちの一つが、△美しの門▽で施しをこうていた男に起こった出来事である。この記事をおして、「初めの教会が何を使命としていたかが、はつきりとわかる。

一、この男が求めていたこと

△美しの門▽は、エルサレム神殿の中にある「異邦人の庭」から「婦人の庭」に入る所にあった門と思われる。△生れながら足のきかない男▽は、ここに座って、△宮もうでに来る人々に施しをこう▽ていた。ペテロとヨハネとがここを通りかかった時も、彼は施しをこうた。働くことのできない彼は、生きていくためには、何とかしてお金を得ることが必要だと思っていた。

著者ルカは、福音書の中で、同じように物ごいをしていて一人の目の不自由な人(バルテマイ)について記している(18章)。しかしバルテマイは、見えるようになることを求めている点がこの男と違う。この男は歩けることを求めているいなかった。そんなことは無理だと、あきらめていたのだらう。

現代でも、多くの人はお金を求めている。お金があれば幸福になると考えている。子どもたちもその影響を受けていることは明らかだ。しかし、私たちはそれに対してはつきり「NO」と言わねばならない。この使徒たちのように。

二、使徒たちが与えたこと

ペテロはこの男をじつと見て言った。△金銀はわたしにはない。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい▽。使徒たちでも小銭は持っていただらう。しかし、それを与えても、この男の生き方は変わらないだらう。最も重要なことは、彼が歩けるようになることだ。でも、どうしたら彼は歩けるようになるのだろうか。

ペテロは、主が目の不自由な人に「見えるようになれ」と言われたことや(ルカ18・42)、中風の人に「起きよ、床を取り上げて家に帰れ」と言われたこと(ルカ5・24)を覚えていたに違いない。彼はそれと同じようにしたのである。ただ、使徒であっても主イエスと同じではない。だから△イエス・キリストの名によって▽と言った。自分が癒すのではない。あくまでも力は主から来る。

死んだ人に力はない。ペテロが△イエス・キリストの名によって▽と言ったのは、このお方が生きておられることを確信していたからである。聖霊なる主が彼の内におられるからこそ、主のなさった奇跡を自分もすることができると信じていたのだ。この箇所には「聖霊」という言葉はないが、聖霊の働きであることは明白である。

ペテロが彼の手を取って起こしてやると、彼は立ち上がり、△歩き回ったり踊ったりして神をさんびしながら、彼らと共に宮にはいつて行った▽。この喜びは、多額の金銀をもらったとしても、決して味わえないものだった。使徒たちは彼に与えたのである。

三、教会がなすべきこと

教会が繁栄していた13世紀、当時の教皇が「金銀はわたしには無い、と言う時代ではなくなったね」と言ったとき、神学者トマス・アクィナスは、「キリストの名によって歩け、と言うこともできなくなりました」と答えたと言う。

教会の使命は、金銀を与えることではない。キリストご自身が教会におられ、このお方の權威ある名が伝えられることである。一人一人が、「私のうちに生きておられる主イエスをあげましょう」と言えるようになってこそ、教会の使命は果たされる。それは奇跡を起こすだけのことではない。金銀では満たすことのできない、寂しき、空しき、悲しみなどを、踊るような喜びに変えることだ。キリストの御名にはその力がある。

結論

今の時代、教会は豊かになった。しかし、キリストの御名が伝えられていなかったら、大変なことである。「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28・20)との約束を信じ、このお方を分かちあおう。キリストは、確かに人を変えてくださる。

研究資料

(足立)

使徒行伝には数多くの奇跡が記録されているが、この出来事ほど福音書にあるイエスの奇跡に類似しているものはない。決定的な違いは、イエスはご自分の権威で癒されたが、ペテロはイエスの御名によって癒した点にある。しかし実際は使徒たちの働きを通して、イエスの権威あるみわざが成されたにすぎない。この出来事には、イエスによる中風の人の癒し（ルカ5・17〜26）、またパウロによるルステラでの足の不自由な人の癒し（使徒14・8〜11）と共通したものがかなりある。ルカは、福音書でイエスの地上生涯に始まった主のみわざを提示したように（参照、使徒1・1）、若いキリスト者共同体による主のみわざを継続して記録している（参照2・43）。使徒行伝において奇跡は常に言葉の奉仕に伴うものであり、福音が前進する中で主の臨在を立証しているか或いは、信仰を持たせるしるしとして起きている。この歩けない人の癒しほど明らかなものはない。

テキスト

1 ペテロとヨハネが祈りの時に宮に上ろうとしていた。彼らはしばしば行動を共にしていた（3・1、3、11、4・13、19、8・14）。午後三時の祈り ユダヤ人が祈りのために定めた時間は、①早朝、朝の犠牲と結びついて、②日中の第九時、夕の犠牲と結びついて、③日没時であった。この場合②である。多くの群衆が犠牲の時に見受けられたと推測される。

2 生れながら足のきかない男 字義的には、彼の母の腹から足が不自由な男、となる。この人が生まれながら歩けなかった事実により、彼の完全な癒しが一層際立つ（参照4・22）。ペテロとヨハネが宮の門に到着したとき、この男が運ばれて来る途中にあり、宮に入る人々から施しものを乞うためそこに置かれるところであった。毎日施しを求めることだけが、彼の生計の手段であった。美しの門 は神殿の異邦人の庭から次の庭に通じている9つの門の一つと考えられるが、どの門か特定するのは難しい。

3 こつた と訳されている動詞は未完了時制なので、繰り返し求めたことを意味する。この歩けない男にとって、ペテロとヨハネは名もなき礼拝者たちにすぎない。

4〜5 ルカは、この節では明確に言及してはいないが、この男の癒しに続くペテロの説教で、はっきりと信仰による癒しを伝えている（3・16）。とするならペテロとヨハネの言動の中には、この歩けない男に信仰による応答を期待して関わろうとしたことが読み取れるだろう。

6 この節がこの箇所を中心である。ペテロが続けて語った。金銀はわたしには無い 初代教会にささげられた献金はペテロに属するものではなかった（参照2・44〜45、4・34〜35、5・1〜2）。彼はイエスに仕えているのであって、金持ちではなかった。しかし、わたしにあるものをあげよう ペテロは、金銀よりはるかに価値のあるものをこの男に提供した。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい ペテロはイエスの御名を提示し、イエスの権威を示した。名という言葉は重

要で、その人格に言及されたすべての啓示を含んでいる。したがってイエスの御名は、彼の降誕、公生涯、苦難、死、復活、昇天に言及している。またキリストという名は、救い主を指し、神の御子を高調している。そしてナザレという言葉は、ピラトがイエスの十字架にしろしとして付けて書いた名であった（ヨハネ19・19）。使徒行伝においてイエスの御名は繰り返し出てくる（2・38、4・10、18、30、5・40、8・12、16、9・27、10・48、16・18、19・5、13、17、21・13、26・9）。

受肉した神の御子イエスの名には、諸々の罪を赦す権威がある（マタイ1・21）。イエスの弟子たちは彼の名によって、預言し、悪霊を追い出し、そして奇跡を行った（マタイ7・22、マルコ9・39、ルカ10・17）。彼らはイエスの御名によって悔い改めと赦しを宣教し（ルカ24・47）、彼のために行動する権威を与えられた。神がイエスの名によって聖霊を注がれると（ヨハネ14・26）、使徒たちは聖なる力と奇跡を成す権威を受ける（使徒3・6、14・10）。イエスがまさに私たちに言われるのは、天の父に祈るときはいつでもイエスの御名によりどこを求めることである（ヨハネ14・13〜14、15・16、16・23〜24）。

7〜8 驚くべき奇跡が起こった。生まれながら歩けなかった男が即刻立ち上がり、飛びはね、踊り出した。それ以上に強調すべきは、癒された彼が神を賛美したこと（3・7、9）。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』

（いのちのことば社）Kistemaker, S. J., Acts (Baker) Polhill, J. B., Acts (Broadman)

聖書	使徒行伝3・1〜10
タイトル	美しの門
暗唱聖句	金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。
目 標	イエス・キリストの御名の力を 知る。
	使徒3・6

導入

(松浦)

世界ではじめての教会がペンテコスの日にエルサレムの町に誕生したことを、先月学びましたね。最初の教会のようすはどんなだったでしょうか。今月はいろいろの出来事を通して、教会のようすと働きを学びましょう。

生まれながらの足のきかない男

『五体不満足』の著者乙武洋匡さんを知っていますか。テレビのレポーターとして活躍しているのを知っている人もいるかもしれませんね。彼は生まれながら足がありません。でも電動車椅子で移動してどこへでも出かけます。今日聖書に登場してくる男の人は、2千年前のことなので、生まれたときから足がきかないため、どこにも行くこともできません。ですから彼は他の人に抱えられて、毎日神殿の「美しの門」のところに置かれていました。彼は40歳を過ぎた人だったので、もう両親は亡くなっていたかもしれません。生きていくためには食べなければなりませんね。彼は生きるためには、お金がなくてはというところで、雨の日も風の日も神殿に来る人々に施しをこうていたのです。彼の心のうちには、歩けるようになりたいという、切実な願いもなく、ただその日その日の糧を得て生きていました。

使徒たちとの出会い

そんなある日、ペテロとヨハネが神殿にやってきました。彼らに施しをこうたところ、「わたしたちを見なさい」と言ったので、何かもらえるのだろうと期待してじっと二人に注目しました。ところがペテロが「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」と言ったかと思うと、男の人の右手を取って起こしてやりました。するとどうでしょう。あら、不思議、彼の足が一瞬にして強くなり、立ち上がったかと思うと歩き出したではありませんか。彼はもう嬉しくて嬉しくてたまりません。踊ったり、歩き回ったりして、神を賛美しながらペテロやヨハネと一緒に宮の中に入って行きました。人々は、「美しの門」のそばで物乞いしていた男の変わりように、ただただ驚くばかりでした。ペテロは奇跡を起こす力をもっていたのでしょうか。いいえ、ペテロには力はありません。けれども、ペテロの心は聖霊のお働きによって、彼に対する燃えるような愛と同情の心があふれ出てくるのを抑えることができなかつたのです。そして彼は、自分の人生をきらめ、絶望の中でただ物乞いをして生きている屍のような男の姿を見たとき、「イエス様なら、この人の人生を輝くものに変えてくださる」と確信したのです。ですから、ペテロは迷うことなく大胆に「イエスの名によって歩きなさい」と言うことができました。聖霊に満たされていたペテロは、金銀のようなものではなく、失われたり、変わることに無い本当に大切なものが何であるかはつきり見分けることができたのです。後に、ペテロは、驚きあやしむ人々にむかって「わたしたちが自分の力や信心で、あの人を歩かせたかのように、なぜわたしたちを見

つめるのか。死人の中からよみがえられたイエスが、いやされたのだ。イエスの名を信じる信仰が、この人を強くしたのであり、このとおり完全にいやしたのだ」と証しています。

教会が世に対して与えるもの

世界最初の教会がエルサレムに誕生してから、今日まで、教会は世に対して何を与えて来たのでしょうか。教会の果たすべき使命は何でしょうか。それは、どんなに時代が変化してもイエス様の名を信じる信仰によって、人は新しく生まれ変わることができると証し続けることにほかなりません。

イエスの名による奇跡は遠い昔のできごとではありません。東京の淀橋教会に峯野龍弘牧師がいっぱいいます。先生は若い日に生きる望みを失って町をふらついている時、教会に導かれてメッセージを聴かれました。その時、「イエス様を信じるとね、私たちの人生は変えられるのですよ。電信柱に花が咲き、焼いた魚が泳ぎだすようにね」と牧師が語られました。理解しがたいお話に目をぱちくりしながら家に帰りました。その後、イエス様を信じた時、それは、先生にとって本当の体験となり、イエス様のために、心燃やされてご奉仕なさっておられます。昔は電信柱は木で出来ていましたが、そんな木に花が咲くなんて考えられませんでした。焼いた魚も泳ぐはずはありません。でも、イエス様は死を打破つてよみがえられた方です。私たちもイエス様を信じ「わたしにあるものをあげよう」といえるような証人（あかしびと）にならせていただきますように。



聖書 使徒4・1～22

テーマ 救いうる名

序論

(鎌野)

先週学んだ一人の男の癒しから引き続いておこった出来事を、今週は取り扱う。今週のテキストにも、△キリストの御名▽という句が何度も用いられていることに注目したい。キリストの御名は、どのような御業を現すのだろうか。

一、病人を癒す

先週学んだように、ペテロがキリストの名によって命じた時、生まれつき足のきかない男が歩けるようになった。しかし、これをきつかけとして、使徒たちが話し始めたのは、△イエス自身に起った死人の復活▽であった。この話を聞いて、△祭司たち、宮守がしら、サドカイ人たちが▽がいら立った。特にサドカイ人は、奇跡や復活などはないと主張していた(使徒23・8)。彼らは使徒たちを捕らえて留置し、翌朝、△議會▽(15節)のまん中に彼らを立たせて尋問した。その時、ペテロは△聖霊に満たされて▽宣言する。△この人が元氣になつてみんなの前に立つているのは、ひとえに、あなたがたが十字架につけて殺したのを、神が死人の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのである▽と。

イエス・キリストの御名は、確かに病を癒す。もちろんいつも必ずというわけではないが、主イエスは今も生きて働いておられるから、主の御旨なら奇跡的な癒しがあっても不思議ではない。た

とい医者や薬を用いたとしても、主がそれを効果あるようにしてくださると受けとめるのが、健全な癒しの信仰なのである。

二、罪人を救う

しかし、からだの癒しよりはるかに重要なのは、魂の救いである。ペテロは続けて、△イエスこそは『あなたがた家造りらに捨てられたが、隅のかしら石となつた石』▽だと言う。これは、詩篇118・22の引用で、最古のメシヤ証言の一つである。主イエスもこれを用いられ、パウロやペテロも引用している(研究資料参照)。主イエスは、当時の宗教的権力者から捨てられ、十字架につけられたが、神はこの方を死からよみがえらせて、人類の救いの基礎(隅のかしら石)とされた。だからペテロは、△この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていない▽と、確信をもって宣言したのだ。

主イエスの十字架による罪の贖いと、復活による神の子との証明は、旧約の預言の成就である。このお方こそ、イエスという名の示すとおり、「おのれの民をそのもろもろの罪から救う者」(マタイ1・22)だとの確信がペテロにあった。十字架と復活を身をもって示したお方は、人類の歴史の中で、イエス・キリスト以外にはない。

イラク戦争以降、「唯一神信仰は危険だ」と言う声が強くなってきた。確かに、自分の信仰を絶対化し、他の信仰を抹殺しようとすることや、他の宗教を頭から否定することは避けるべきである。

しかし、「唯一神信仰」を頭から否定することも、また同様に危険であると指摘せねばならない。

三、使徒を強める

ペテロとヨハネは、律法の専門的教育を受けず、ガリラヤで漁師をしていた△無学な、ただの人▽だった。しかし、宗教的な権威者を前にしてもおじけず、大胆に語ることができた。なぜか。それは、△彼らがイエスと共にいた者▽だったからである。主ご自身も、「この人は学問をしたこともないのに、どうして律法の知識をもっているのだろうか」と言われていた(ヨハネ7・15)。彼らは、この主イエスと共に生活し、律法の精髓を学んでいた。またこの時も、このお方が聖霊として、自分と共におられることを自覚していたのだ。

宗教的権威者たちは、協議の後、△イエスの名によつて語ることと説くことも、いっさい相成らぬ▽と言いわたした。しかし二人は、△自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない▽と答えた。迫害されたとき、「語る者は、あなたがたの中にあつて語る父の霊である」(マタイ10・20)と、主から言われていたことを、二人は思い出していたに違いない。

結論

私たちは自分の力で宣教するのではない。主イエスの御名、主イエスの権威によつて、全てを行うのである(7節)。常に主イエスを思い起こし、このお方に寄り頼んで歩んでいこう。

研究資料

(足立)

使徒行伝においてこの時点までユダヤ人側からのキリスト者への抵抗はなかった。実際伝達されている内容は、一般的な受容と人々に好意を持たれたことである(参照2・47)。4章において場面は一転するが、それは民衆からのものではない。彼らは続けて使徒たちのメッセージに好意的に応答していた(参照4・4)。使徒たちに対して態度を変えたのは当局者たちであった。第一の敵は祭司階級のサドカイ派であった。彼らは使徒たちを2度逮捕した。彼らは最初ペテロとヨハネに手をかけ留置した。この時二人の使徒たちは御名の宣言のゆえ予備聴聞となった。しかし使徒たちはこの警告を受け入れず、より一層キリストを伝えたので、サドカイ派は激怒し、使徒たち全てを逮捕し苦しめた(5・17・42)。

この部分は大きく2つの区分に分けられる。最初が、逮捕(1・4)、尋問(5・7)、ペテロとヨハネの答弁(8・12)。第二は、議会での審問、使徒たちへの警告、使徒たちの応答と解放(13・22)。

テキスト

1 ペテロの説教が祭司たち、宮の守衛長、そしてサドカイ人たちにより構成されるユダヤ当局者に突然妨害された。彼らが とあるのは興味深い。ペテロの説教が遮断されたのであったが、ヨハネは黙っていたわけではない。彼もキリストを証ししていたのであろう。ここで逮捕する集団の側に祭司たちがいたのは、その日夕の犠牲をささげる務めとの関連であらう。宮守がしらと共にエルサ

レム神殿の管理責任者であった。サドカイ人が二人を逮捕する権威を持っていたのは明らか。彼らは貴族階級に属し、高位の祭司階級に属する者もいた。

2 死人の復活や天使の存在を否定するサドカイ人(使徒23・8)にとつて、ペテロとヨハネがイエスの復活を宣証するのが困惑の原因であらう。

3 ペテロとヨハネが午後3時の祈り(3・1)に神殿に来たことを考慮すると、この時ははや夕暮れ。日没前に二人の行動を尋問する時間はない。従つて逮捕された二人は、一晚留置された。

4 二人の宮での働きは一時中断されたが、彼らの説教は届いていた。歩けない男が癒された事実(3・8・10)とみ言葉の伝達(3・12・26)により、更に信仰者は男だけで5千人に増えた。

5 翌朝、使徒たちを尋問する会議が召集された(参照ルカ22・66)。ここでルカは「議会」(サンヘドリン)という用語を使っていない(参照4・15で使用)。しかしここでの言及がこの国の権威ある法廷であつたことには間違いはない。

6 大祭司アンナス ルカの3・2とこの個所でもアンナスは大祭司と呼ばれている。ここでアンナスは元老の前大祭司で依然として影響力を持っていたようで、彼の養子で職務上議長の役を務める現大祭司が、カヤパ(ヨハネ11・49)。この二人がイエスの断罪に関わつてから、わずか数週間が経つただけ(参照ヨハネ18・13・24)。その他彼らの親族も何名か同席した。議会の召集そのものが、使徒たちの働きによりユダヤ社会に衝撃が走っていることを示している。

7 ペテロとヨハネは留置場から引き出され、議会の真ん中に立たされた。そこで使徒たちに持ち

かけた問いは、あなたがたは、いったい、なんの権威、また、だれの名によつて、このことをしたのか。何の権威によつてと言う尋問は、かつてイエスにも向けられたもの(ルカ20・2)。議会は使徒たちの教えの源に関心がある。

8 使徒たちの説教の背後にある「名」に関する問いは、職権付与と認可を問うものだった。足の不自由な男は、イエスの御名によつて癒された。そこでペテロは彼らに説教を語った。まさにイエスの約束の成就として(ルカ12・11・12)、ペテロは大胆に証言するために聖霊の豊かな注ぎを受けた。

9・12 この個所は、救いをもたらす御名に関する小説教を構成している。それは、議会により提起された名への言及(7)で始まり、ペテロによつて繰り返された(10)。そしてその名は歩けない男の癒しに関して深く結びついている(9)。「いやされた」と訳されている動詞(ソーゾー)は、救われたと言う意味。この癒しと救いという2つの概念は、救いに関して他に名はないと言う結論をもたらしている(12)。実にこの説教の最重要点は、ギリシャ語ソーゾーの役割にある。このことばは癒しの意味で肉体の救いを意味し(9)、また救いの霊的、終末的な意味(12)も同様に持っている。イエスの御名を通して歩けなかった男が肉体的に救われたことは、信仰により主の名を呼び求める者すべてに与えられるはるかに偉大な救いを指し示している。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』(いのちのことば社)、F.F.ブルース「使徒行伝」(聖書図書刊行会)、Polhill, J.B., Acts (Broadman)

聖書

使徒行伝4・1〜22

タイトル

救いうる名

暗唱聖句

この人による以外に救はない。

使徒4・12

目標

私たちを救いうる名は「イエス」のみと信じる。

導入

(松浦)

今の時代は情報化社会といわれています。テレビやパソコン、携帯電話など小学生でも自由にあらゆる情報が耳や目に入ってきて、何が正しいことか分からなくなってきています。皆さんは自分で、何が一番大切なものだろうかとよく考えることが大切です。

イエスの名の方

先週学んだ生まれつき足のきかなかった男の人は、ペテロやヨハネにお金を求めましたが、ペテロによって、イエスの名を信じる信仰が与えられ見事に歩けるようになりましたね。

イエスの名には、人を百八十度変えてしまう力が秘められているのです。この男の人は40年もの長い間、歩けないというハンデを背負って生きてきました。それだけでなく、彼の心には暗い闇が覆っていて、喜びも希望もなく、ただ物のように美しの門のところに置かれていたのです。ところが、イエスの名を信じる信仰によって、肉体はいやされ、心も息を吹き返したように、喜びで満たされました。それだけでなく、彼はまず神様を賛美しました。「イエス様はすばらしい！」と神様をほめたたえる者に変えられたのです。

弁明するペテロとヨハネ

神様をほめたたえながら、ペテロやヨハネと一緒に神殿に入ってきた男の人を見て、人々は驚いて集まってきました。ペテロは集まってきた人々に向かって、「みなさん、この人の足をいやしたのは私たちではありません。イエス様です。イエス様は十字架につけられ殺されましたが、よみがえって今も生きていらつしやいます。イエス様が生まれつき足のきかなかったこの人を立ち上げさせたのです。イエス様こそ私たちの救い主なんです。」話を聞いた人々は、イエス様を信じました。男の数だけでも5千人もいたのです。

この様子を知った祭司や役人たちは、ペテロとヨハネを捕らえて留置し、明るる日、議会の真中に立たせて尋問しました。ペテロは聖霊に満たされて言いました。「生まれつき足のきかなかった男がどうしていやされたのか、みなさんに知ってもらいたい。この人が、みんなの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺したのを、神が死人の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです。イエスは、家造りらしいにいらぬと捨てられた石のように、排除され、十字架に付けられ殺され死にました。しかし、神はこの方をよみがえらせて、隅のかしら石として、全ての人の救いの基礎の石とされました。ですから、このイエス以外にわたしたちを救う御名は、天下のだれにも与えられていないのです。大胆に堂々と語る様子を見て、祭司たちや律法学者、役人たちは返す言葉もありません。しかも、彼の側には美しの門で物乞いしていた男が、「イエス様が僕の足を立たせてくださった！」と喜び踊っているのですから。

困難が起っても動じない使徒

その弁明の後、ペテロとヨハネは「今後いつさいイエスの名によって、語ることも説くこともしてはならない」と命じられました。しかし、彼らは「自分の見たこと、聞いたことを語らないわけにはいかない」ときっぱり答えました。ペテロたちは、イエス様が以前お話になった事を思い出していたのでしようね。イエス様はこう話されました。「あなたがたは、わたしのために人々の前に引き出されることがあるでしょう。それは人々にあかしをするためなのです。その時、何をどう言おうかと心配しないでください。あなたがたの中におられる父の霊が語るべきことを教えてくださいますから」と。使徒たちは、困難に屈することなく、イエス様をあかししました。主が共にいてくださって教え、導いて、語らせてくださったのです。私たちもイエス様の御名に寄り頼んで毎日を過ごしましょう。

新谷はるゑさんは峰山教会の古い信徒ですが、お嫁に来る時、結婚する条件を二つ出してOKなら結婚すると心に誓いました。一つは毎週教会の礼拝に行かせてほしい事、家庭集会を開かせてほしい事の二つでした。OKが出て、村でただ一人のクリスチャンとして歩みました。イエス様の名こそ私の全て、人を救うものだ確信していたからです。はるゑさんが主と共に歩む事を通してご主人も、子どもたちも、村の人たちも救われました。今もその信仰の火は受け継がれて輝いています。

(改訂こどもさんびか7)



聖書 使徒5・1～11 テーマ 神の教会

序論

(鎌野)

先週は、外部から教会に加えられた迫害を学んだが、今週は、教会の内部に起こった問題を取り扱う。誕生したばかりの教会には様々な試練があった。しかし、神の教会の保護者は、神ご自身である。今週の箇所から、神は次のようにして教会を守ってくださることがわかる。

一、善意の人を起こされる

4章の最後には、「慰めの子」と言う意味の名をもつバルナバが、教会の必要のために、自分の畑を売った金を使徒たちの足もとに置いたことが記されている。神は、彼以外にもこのような善意の人を多数起こされた。「信じた者の群れは、心を一にし、思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものだと言張る者がなく、いっさいの物を共有にしていた」のである(4・32)。

これを「原始共産制」と言う人もいるが、決して制度ではない。主イエスを救い主と「信じた者」には、神の家族として、分かち合う心が与えられていたので、自発的にそのようにしたのだ。12弟子たちが主とともに過ごした3年間は、まさにそのような生活だったに違いない。

二、欺く人を裁かれる

しかし、△アナニヤという人とその妻サツピラとは共に資産を売ったが、共謀して、その代金を

ごまかし、一部だけを持ってきて、使徒たちの足もとに置いた▽。彼らは、外面的に見るならば、バルナバがしたのと同じことをしたのだが、その心は全く違っていた。売上代金の幾分かを自分のふところにいれ、残りの金額をもってきて、それを全部であるかのように持ってきたのだ(8節参照)。それを見抜いたペテロは、△どうしてあなたは、自分の心をサタンに奪われて、聖霊を欺き、地所の代金をごまかしたのか▽と、厳しく問いたたした。後に妻のサツピラにも、△御霊を試みるとは、何事であるか▽と叱っている。

△聖霊を欺く▽、△御霊を試みる▽という表現が繰り返されている点に注意したい。神の教会は、単に人が集まったものではない。使徒2章で学んだように、教会が誕生したのは聖霊がくだったからである。聖霊の臨在しない教会はありえない。だからこそ、アナニヤ夫妻は、△人を欺いたのでではなくて、神を欺いたので▽。

アナニヤとサツピラがその場で死んでしまったことに問題を感じる人もいるだろう。現代ならスキャンダルになる事件である。しかし、ペテロが殺したわけではない。これは主の裁きだった。教会が誕生した直後だからこそ、神は、聖霊の臨在を示すために、このような厳しいことをなさったのである。ちょうど、約束の地に入った直後、アカンが奉納物を取ったとき、彼と彼の家族が殺されたことと似ている(ヨシヤア記7章)。どちらも、神の共同体が新しい出発をするときだった。神ご自身がそこに臨在しておられるゆえに、その裁きは厳しかったことに留意したい。

三、健全なおそれを与えられる

アナニヤが突然に死んでしまったことを△伝え聞いた人々は、みな非常なおそれを感じた▽。さらにサツピラも急死した時には、△教会全体ならびにこれを伝え聞いた人たちは、みな非常なおそれを感じた▽。口語訳が△おそれ▽と記す語を、新改訳と新共同訳は「恐れ」と漢字表記する。日本語では「恐れ」というと「恐怖」の意味が強くなるので、「畏れ」とするほうが良いと言う人もいる。しかし、「神を恐れることは、神に完全に寄り頼んでいる人の基本的な態度として、信仰から切り離すことはできない」(『新約聖書神学辞典』9巻209頁)。「主を恐れることは知識のはじめである」(箴言1・7)。

重要なのは、神を侮ったり、軽んじたりしてはならないことである。神は人よりはるかに聖く、全知全能であられ、人の心の中までもご存じだ。教会には、そのお方の聖霊が臨在しておられる。それを自覚していないと、教会は人間の集団に成り下がってしまう。教会につながる私たちは、健全なおそれを持たねばならない。そうであってこそ、私たちの信仰は緊張したものとなる。罪から離れ、きよく生きることができる。初代教会の圧倒的な力の秘訣は、そこにあった。

結論

「神が御子の血であがない取られた神の教会」(使徒20・28)には、聖霊が満ちておられる。私たちは、この聖霊を愛し慕うとともに、恐れをもつて敬う生き方をしたいこうではないか。

研究資料

(足立)

バルナバ(4・36、37)を信仰共同体の分かち合いの積極例とするなら、アナニヤとサツピラの出来事は鋭い対照を提示している。この夫妻も資産を売却し、売り上げを共同体に寄付しようとした。しかし彼らは売り上げの一部を保持し、恐ろしいさばきに合い、結果二人とも死んだ。私たち読者には、幾つかの疑問が湧いてくるかも知れない。この二人へのさばきは、あまりにも厳しすぎて、救いがなく、福音と調和しないように見える。このような問いが返ってくるのは当然であろう。しかし正確な評価を得るために、まずテキストそれ自体からじっくり聞き、何が主張され何が言われているのかを吟味することが賢明であろう。

この箇所は二つに分けられる。アナニヤとの対決(1、6)とサツピラとの対決(7、11)。両区分でペテロは、共同体の基金を託された使徒たちの代表(4・35)として対面を持った。男性と女性の両者に同等の時間が与えられているのは著しい。

テキスト

1 ルカがバルナバ(4・36、37)とアナニヤ夫妻を対比させているのは明らか。そもそも5・1、11は4・32からの関連で記されている。アナニヤとはヘブル語で「神は慈悲深い」、サツピラとはアラム語で「美しい」を意味する。

2 4・35、37に「使徒たちの足もとに置いた」とある。これは、初代教会の人々及びバルナバが自分たちの所有物を処分してその代金を献金した

ことを表している。ルカは、この2つの例と比べてアナニヤ夫妻の献金が偽善行為であったと主張している。はじめの二つの場合が主の恵みに対する自発的行為であるのに比して、アナニヤ夫妻の場合は外面的には同様に見えるが、その動機が間違っていると言えよう。

3 アナニヤが自らの献金を地所の一部と言えは問題はなかった。しかも献金は神にささげられるもの。ペテロや使徒たちに対するものではない。**自分の心をサタンに奪われて** イスカリオテ・ユダと同様(参照ルカ22・3)サタンがアナニヤの心を占領した。ユダのようにアナニヤは金に動機づけられた(参照ルカ22・5)。使徒行伝で最初に使われたサタンという言葉。

4 初代教会の信仰者がみな財産を献金しなければならなかったのではない。4・32に「だれひとりその持ち物を自分のものと主張する者がなく」とあるが、それはたとえ持ち物が自分のものであるとしても、それを自分のものだと言う心ではなかったと言う意味。

5 明らかに神のさばき(参照ヘブル10・31)。アナニヤの行為は初代教会の麗しさを傷つけただけでなく、神が明確に罪を罰せられることを示している。息が絶えたと言う動詞は、5・10、12、23でも使われているが、いずれも聖なるさばきを意味する。**みな非常なおそれを感じた** とは直訳すると、来た偉大な畏(おそ)れが、このことを聞いた者たちすべての上に、となる(参照2・43、5・11、19・17)。

6 死は必然として葬りに至る。

7 三時間ばかりたってから とあるが、アナニ

ヤが死んでからか、それとも葬られてからかは定かではない。ルカはアナニヤの死について詳しく記していない。彼の唯一の目的は、サツピラが夫同様二枚舌であることを容赦なく指摘すること。彼女は夫と基金の共謀を企んだ。

8 ペテロはアナニヤの死を報告することより、率直にアナニヤ夫妻が売った地所の代金を尋ねた。これはサツピラへの悔い改めの機会を提供している。**そうです、その値段です** とあるが、2節の「共謀して」という言葉を裏付ける返事となる。

9 ペテロは、アナニヤ夫妻の行為が主の聖霊に対する罪であることを宣告した。ペテロの役割は直面させることで、さばきにあるのではない。さばきは神ご自身から来る。しかしペテロは、サツピラの行為の成り行きを彼女の前に置かねばならなかった。彼女は夫と共謀して聖霊を試みた。**あなたを葬った人たちの足が、その門口に**

ている。あなたも運び出されるであろう サツピラは初めて自分の夫の死について耳にし、結果彼女は即座にペテロの足元に倒れ、死んだ。

10 サツピラも夫同様、主の厳かなさばきにより地上の生涯を終えた。

11 みな非常なおそれを感じた 畏れとは当然神に対するそれ(参照5・5)。教会全体 ルカが使徒行伝において最初に使用した教会(エクレシア)という言葉。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』(いのちのことば社)、榎原康夫『使徒の働き・上』(いのちのことば社)、Polhill, J.B., Acts (Broadman),

聖書	使徒行伝5・1～11
タイトル	神の教会
暗唱聖句	あなたは人を欺いたのではなくて、神を欺いたのだ。 使徒5・4
目 標	神を欺く罪の恐ろしさを知り、神を畏れて歩む。

導入

(松浦)

「天知る、地知る、我知る、人知る」ということわざがあります。これは誰も知らないと思っても、天地の神がすべてを知っており、私もあなたも知っている。不正や悪事はいつか必ず現されるものだという中国の故事からきたことわざです。

最初の教会の様子

世界で最初の教会は、立派な建物があったわけではありません。しかし、イエス様を信じた人々は心一つにし、思い一つにして、イエス様の復活について力強く証していました。人々の中には、乏しい者は一人もなく、すべての物を共有して生活していました。みんなからバルナバと呼ばれていた人は、自分の畑を売ったその代金をペテロやヨハネなど使徒たちの足元に置いて「教会の働きのために使ってください」と、喜んで献げました。その他にも、家や土地を売る人々が起こされて、教会は、神の家族としてすべてのものを分かち合いながら過ごしていました。

ある一組の夫婦の様子

そんなある日の事です。アナニヤとサツピラという夫婦が、他の人のように自分たちの資産を売り

ました。しかし、共謀して、その代金をごまかし、一部だけを持ってきて、さも全てであるように使徒たちの足元に置きました。その様子は、こんな風でした。「ペテロ先生、私たちの資産をこれこれの値段で売りました。どうぞ、神様のためにお使いください」。ペテロは、その値段を聞いて彼が偽りのささげものをした事を見抜いて、「アナニヤよ。どうしてサタンに心を奪われて、聖霊を欺いて地所の代金をごまかしたのか。それはもとあなたのものであり、売らずに残しておけば、あなたのものであり、売ってしまったも、あなたの自由になったはずではないか。どうして、代金をごまかして、全てのように偽って持つてくる気になったのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ」。その言葉を聞いていたうちに、アナニヤは倒れて息が絶え死んでしまいました。若者たちが立って、その死体を包み、運び出して葬りました。

3時間ばかりたつてから、彼の妻サツピラが、夫が死んだ事もなんにも知らずに入って来ました。そこで、ペテロは、彼女に言いました。「あの地所は、これこれの値段で売ったのか。そのとおりか」。彼女は「そうです。その値段です」と答えました。そこでペテロは「あなたがたふたりが、心を合わせて主の御霊を試みるとは、何事であるか。見なさい、あなたの夫を葬った人たちが戸口まできている。あなたも運び出されるであろう」と言うやいなや、彼女はペテロの足元にパタッと倒れて、死んでしまいました。このことを伝え聞いた人々と教会全体は、非常なおそれを感じました。

教会は聖臨在の場所

アナニヤとサツピラの突然の死は、教会全体と

これを伝え聞いた人々のうちに、神を恐れかしこまねばならないという思いを植え付けました。神様は目に見えないお方です。イエス様のお姿も今では見えません。もちろん聖霊も目に見えませんが、確かに信じる者たちと一緒にいてくださって共に歩み、慰め、励ましてくださるお方なのです。神様は、決して侮ったり、軽んじたりしてはならないお方だということを、人々は心深く刻みつけました。

旧約時代にも、同じような事件が起つた事が記されています。昔、イスラエルの人々が約束の地に入ったとき、神様のご命令にそむいてアカンという人が、分捕り物をごまかして自分の所有にしたことがありました。アカンは敵の分捕り物の中にそれはそれは美しい外套があるのを見て、欲しくなりました。それと共に、銀と金の延べ棒1本を隠して持ち帰りました。天幕の中や、土の中に埋めて隠し持っていたのです。誰もそんな事知りません。ところが、神様はその事をご存知でした。神様の目はごまかすことはできません。指導者ヨシユアが祈っている時、その隠れた罪を示して、アカンとその家族全員、また彼の持ち物すべてをアカルの谷で焼き滅ぼされました。昔も今も神様は生きた聖なるお方です。教会はイエス様を信じる人の集められた聖なるところです。私たちはどんなときも、神様が見ていらつしやることを心に覚えて歩んでいきましよう。

♪主にしたがい行くは♪

(教会学校せいいか82、讃美歌21 507)



聖書 使徒7・51～60

テーマ 殉教者ステパノ

序論

(鎌野)

アナニヤ事件以後も、神の教会には外部からの迫害(5章後半)、内部の配給問題(6章前半)と、様々な試練が続いたが、神は不思議な御手によって彼らを守ってくださった。そして、6章後半から7章まで、大きなスペースをさいて、ステパノ事件が述べられる。今週扱う箇所はこの事件の結末部であり、主イエスの最期と似た構成で、ステパノの殉教の意義を記録している。この事件は、主を裁いたのと同じ「議会(サンヘドリン)」(6・12)において、主の十字架架刑の2～3年後に起こったと考えていいだろう。

一、ステパノの説教

7章冒頭からの説教を一言で言うと、イスラエルの人々は、その長い歴史の中でずっと神に逆らってきたことを、厳しく批判するものだった。そしてこの結論部でステパノは、目前にいる宗教的権威者の罪を三つ指摘したのだ。①彼らは、先祖たちと同様に、△いつも聖霊に逆らっている▽。②彼らは△正しいかた(主イエス)を裏切る者、また殺す者となった▽。③彼らは△律法を受けたのに、それを守ることをしなかった▽。

最も重要なのは、②である。先祖たちは、△正しいかたの来ることを予告した▽預言者を迫害したが、あなたがたはその正しい方を殺したと、主イエスの死の責任を彼らに問うたのだ。主ご自身

も、十字架にかけられる直前に、ユダヤ人が預言者に加えた多くの迫害について、その責任を問うておられる(マタイ23・29～36)。彼らの多くは、主イエスの裁判の時にも議会にいたであろう。彼らは、自分が正しい裁判をしたと思っていたかもしれないが、ステパノは、それは聖霊に逆らい、律法を破ることだったと断言した。

二、ステパノの殉教

議会にいた人々は△これを聞いて、心の底から激しく怒り、ステパノにむかって、歯ぎしりをした▽。宗教的権威者たちは、どこの馬の骨ともわからないステパノが、自分たちを酷評することに耐えられなかった。さらに彼が△ああ、天が開けて、人の子が神の右に立つておいでになるのが見える▽と言うのを聞き、これは明確な冒瀆罪だと判断して、彼を石打の刑にしたのである。主が数年前にこの同じ席に立ち、「人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」(マルコ14・62)と言われていたことを思い出した長老たちもいたであろう。

△人の子▽とは、ダニエル7・13で預言されている神的な称号である。この句を主イエス以外の人が用いている例はここにしかない。ステパノは、宗教的権威者たちが殺した人物は、今、神の右におられることをここで明確に示したのだ。

主は、「人の子が力ある者の右に座し」と言われたのに、ステパノは△右に立つて▽おられると言ったのは、主が自分の弁護者として、証言席に立つておられることを表しているという説は、傾聴

に値する(ブルース『使徒行伝』186頁)。宗教的権威者が自分を迫害しても、主ご自身は自分の味方だと、ステパノは確信していた。

三、ステパノの祈禱

人々が△ステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつづけていた。△主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい▽と、△主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい▽という祈りである。この両者とも、ルカによる福音書に記されている「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」(23・46)、「父よ、彼らをおゆるしください」(23・34)という、主イエスの祈りと似ている。しかし、ステパノは、主のこの祈りを知った上で、父なる神ではなく、主イエスに呼びかけたのである。

ステパノの最期は、主イエスと同じようだった。むごたらしい刑であつたが、△眠りについた▽と描写されているように、非常に平安なものであつた。この情景は、すぐそばにいて一部始終を目撃していた△サウロという若者▽に大きな影響を与えたことは、疑えない事実だろう。ステパノは一粒の麦として殉教したが、数年後、そこから、偉大な伝道者パウロが生まれてきたのである。

結論

ステパノは、祭司でもなく、使徒でもなく、エルサレム教会の一信徒だった。しかし、「御霊と知恵とに満ちた」人(6・5)、主イエスに倣って歩んだ人だった。私たちも彼のようにになりたい。

研究資料

(足立)

使徒7・15に、ステパノの演説が記されている。ステパノの顔が天使のような輝きを放ちつつ(6・15)、彼はイスラエルの歴史を詳しく物語ることにより、議会に答える。その内容は族長アブラハム(7・15-8)から始め、続いてヨセフとエジプトにおけるイスラエル民族の始まり(9・9-16)に言及し、そしてモーセの試練(7・17-22)、挫折(7・23-29)、派遣(7・30-36)、教え(7・37-43)へと注意を呼び覚ます。彼は、イスラエルの歴史が不従順によって損なわれていることを指摘する。又彼は幕屋や神殿の建設に言及しつつ、神が礼拝する場所に制限されないお方であることを示す預言(イザヤ66・1-2)を引用している(7・44-50)。そして彼は、イスラエルの不従順は神とそのみ言葉へのそれであると適用し、結論づけている(7・51-53)。この演説によりステパノは、イエス・キリストにおいてこそイスラエルの歴史、律法、神殿が完成されていることを論証した。しかしこの真実な意味づけにより議会の人々の反感を買い、彼は殉教する。

テキスト

51-53 この適用部分への反感(7・54)が、即座に起こったのは明らか。理由は、ステパノが第一人称から第二人称に変更した故。これまで彼は、ユダヤ人への言及に自分自身を含めてきた。それは常に「私たちの先祖」(参照、原文7・19、38、39、44)であった。しかしここでは **あなたがたの先祖** となっている。もはやステパノはユダヤ

人の歴史に問いかけたのではなく、聴衆に直接人格的にアピールしている。また彼は預言者のことばを使って、彼らを責めた。強情で(参照、出エジプト33・3、5、34・9、申命記9・6、13)。心にも耳にも割礼のない人たちよ(参照、レビ記26・41、エレミヤ4・4、6・10、9・26、エゼキエル44・7、9)。彼の全体のスケッチは、指導者を拒否するイスラエルの一貫した行動パターンを指し示している。聖霊に満たされたステパノ(6・3、5)は既に彼らの抵抗を経験していた(6・10)。又同様なことが起こる(7・55-58)。イスラエルは主の言葉を語った聖なる預言者さえ殺した(ルカ11・47-51、13・34)。更に重要なことはこれらの預言者たちは、メシヤの到来を預言した(参照3・18、24)。ここでステパノは **正しいかた** としてメシヤに言及。この言葉は既にペテロの説教で使われた(3・14)。実際ペテロとステパノの説教は似通っている。二人は、正しい方を拒んで殺したユダヤ人の聴衆を責めた(3・14-15)。54-55 ステパノが聴衆に悔い改めを求めて直接アピールする意図があったかどうかはわからない。心の底から激しく怒り(参照5・33)。歯ぎしりをした(参照詩篇35・16)。彼らの怒りは頂点に達していた。一方ステパノは、天の栄光と神の右に立つておられるイエスを見ていた。

56 ステパノは、激高した議会とその経験を分かち合うかのように **ああ、天が開けて、人の子が神の右に立つておいでになるのが見える** と言った。イエスは十字架前夜ご自身の出現に関して、同様な言葉を語られた(ルカ22・69)。これは、イエスが預言されたことをステパノが現実に起こしたこととして宣言した格好となっている。事実イエスは復活して、神の右にある権威の座に着座された。ここでステパノはイエスを **人の子** と主張している。これは新約聖書においてこの言葉が、イエスご自身以外によって語られた唯一の事例である。イエスが立つておられるのは、見事に証言した聖徒を称賛し、迎え入れる姿勢であろう。

57-58 ステパノが幻を証言したことで議会の猛烈な怒りが最高潮に達した。そして彼らは唯一の結論を引き出した。彼らは鋭く叫びながら、ステパノに襲いかかり、彼を町の門の外に投げ出し、そして彼に石を投げ始めた。死刑の執行は正規の手続きを取っているとは思われない(参照ヨハネ18・31)。彼らはステパノの演説に冷静に反駁することを断念し、ローマ総督の許可も得ずに彼を刑場に引き立てた。ステパノの死と結びついて初めてサウロの名が登場している(参照8・1)。彼は議会のメンバーであった教師ガマリエルの一神学生であった(5・34、22・3)。

59-60 ステパノは聖霊に満たされた人として死んだ(7・55)。主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい。彼の最期の言葉は、あの十字架上のイエスの祈りを反響している。イエス自身が死ぬ瞬間、御父に語った言葉に似ている(ルカ23・46)。主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせなさい。この祈りも十字架上のイエスの赦しを想起させる(ルカ23・34)。彼は眠りについた。ステパノの死は、復活への希望と暗示を含んでいる。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』(いのちのつば社)・Kistemaker, S. J., Acts (Baker), Polhill, J. B., Acts (Broadman)

聖書 使徒行伝7・51〜60
 タイトル 殉教者ステパノ
 暗唱聖句 主よ、どうぞ、この罪を彼らに
 負わせないで下さい。
 使徒7・60
 目 標 殉教者ステパノの祈りに学ぶ。

導入 (松浦)

みなさんの中に教会に行っていることを友だちにかからわれたり、ばかにされたりしたことがある人はいませんか。そんなとき、みなさんはどうしますか。いじわるする友だちのために祈ることができるとはいい。今日は、迫害する人々のために祈りながら、死んでいったステパノさんのことを学びましょう。

ステパノの説教

ステパノさんは弟子たちと一緒に教会の働きをする信徒の一人でした。さまざまな雑用をこなしながら、イエス様のことを力強く語るメッセンジャーでもありました。ステパノさんが、立派に話せば話すほど、彼を憎たらしく思う人々がいました。イエス様を信じないユダヤの指導者たちです。彼らは何とかステパノさんを罪に陥れようと人々をそそのかして、彼を捕え、議会にひっぱってこさせました。しかし、ステパノさんは、恐れるどころか神様の守りを信じて、人々に証をするチャンスがきたことをむしろ喜んでるように見えました。人々が彼の顔を見たとき、輝いて、まるで天使の顔のように見えたそうです。なんとすばらしいことでしょうか。

ステパノさんは、議会にいる人々に向かって堂々と語りました。「みなさん、あなたがたは先祖たちと同じようにいつも聖霊に逆らっています。そして、正しい方が来られることを前もって宣べ伝えた人々を殺しましたが、今あなたがたは、正しい方（主イエス）を裏切る者、殺す者となりました。それだけでなく、御使いたちによって伝えられた律法を受けたのにそれを守ったことはありません」。それを聞いた人々は、ステパノさんの大胆な言葉に歯ぎしりして、はらわたが煮えくり返るほど怒りました。

ステパノの最期と祈り

しかし、ステパノさんは聖霊に満たされて、語り続けました。そして、天を見つめていると、神の栄光が現れ、イエス様が神の右に立つておられるのが見えました。そこで、彼は「ああ、天が開けて人の子が神の右に立つておられるのが見える」と言いました。それを聞いた人々は怒って、大声でわめきながらステパノさんに飛びかかり、彼を町の外に引きずり出して石を投げつけたのです。ステパノさんは、何の抵抗もしないで、ただなされるままに祈り続けていました。彼の目には天上のイエス様のお姿が見えていたことでしょうか。そして、イエス様のほほえみと励ましに支え続けられていたのでしょう。石は雨のように飛び続け、人々の目は憎しみのため血ばしって、わめきながら石を投げつけています。そのような中、彼は「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と祈りました。そして、ひざまずいて大声でこう叫びました。「主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい」。こう言って、彼は永遠の眠りにつきました。ステパノさんは、イエス様を証したため殺された、最初の殉教者となりました。その後、多くの人々

の命がけの証をおして、今日までイエス様の十字架の愛と復活が宣べ伝えられてきました。小さな私たちですが、お友だちに、お家の人に、イエス様のことをお話ししてあげましょう。イエス様を信じる人が増し加えられるようにね。

20世紀最大の殉教

南米エクアドルのアマゾンの源となつている秘境地帯にアウカ族が住んでいます（地図を用意して場所確認をしてください）。この人々は、人類が月面を歩くような時代を迎えているのに、原始生活をしている凶猛な一族でした。この人々にイエス様のことを宣べ伝えようと5名の若い米人宣教師がこの地を訪ねました。1956年のことです。しかし、彼らはまもなく凶猛なアウカ族にやりで突き殺されるという殉教の死をとげました。しかし、この殉教者の夫人や子どもたちは、悲しみの中から力強く立ち上がって祈りました。夫たちの出来なかつたことを私たちがやらせていたのだこうと、アウカ族伝道のために献身したのです。その結果、10年も経たない1964年にエリオット夫人らとアウカ族の協同によって、彼らの言葉に翻訳された聖書マルコ福音書が完成しました。さらに、驚くべきことに殉教者の二人の子どもは、かつて父を殺したアウカ族の中から献身して牧師となった方の司式で、現地のクラーライ川で洗礼を受けたということです。勇気をもってイエス様を宣べ伝えるときすばらしい事が起ってくるのですね。（聖書翻訳の足跡）から）

♪わたしはちいさいひよ（ふくいんこどもさんびか86）



聖書 使徒9・1～19 テーマ サウロの回心

序論

(鎌野)

使徒行伝13章以降は、福音が異邦人に伝えられていく様子を記録するのだが、その働きの中心人物がサウロ（後にパウロと改名）である。今週の聖書箇所は、彼がそのようになった経緯を詳しく述べている。本書の22章と26章で、彼は、自分身の口からこの経験を語っているの、ぜひ目を通して読んでいただきたい。彼の回心と言われるこの出来事の中に、三つの声があった。

一、サウロの内心の声

ステパノの最期の姿を目撃したサウロは、この宗教が恐ろしい影響力を持っていることを認めざるを得なかった。このまま放置しておけば大変なことになると思ったのだろう。彼は「家々に押し入って、男や女を引きずり出し、次々に獄に渡し、教会を荒し回った」（8・3）。たまたさエルサレムから逃亡した弟子たちを捕まえるため、彼はその許可を得ようと、△大祭司のところに行つて、ダマスコの諸会堂あての添書を求めた▽のだ。

このような彼の行動の背後に、「熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者である」との確信があった。しかし、「律法による自分の義」では、神の前に立てないことを彼は次第に感じるようになった（ピリピ3・6～9）。彼の内心の声は、「サウロ、それで良いのか」とささやいていたのではなからうか。

二、主イエスの声

彼がダマスコの近くに来た時、突然天から光がさし、△サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか▽という声を聞いた。彼はそれが超自然的な声であるとは認めたが、だれの声かはわからなかった。しかし、続く言葉は明確である。△わたしは、あなたが迫害しているイエスである▽。

二つのことに留意したい。第一に、彼はそれまで、イエスという人物を異端の教祖と考えていた。ところが、天から響く声は、「わたしはイエス」と言う。とするなら、イエスは決してそんな人物ではない。後にサウロは、復活されたイエスが自分に現れてくださったと書き記している（1コリント15・8）。このお方こそ、「見えない神のかたち」なのである（コロサイ1・15）。

第二に、彼はそれまで、この異端の教えを奉じる熱狂者たちを迫害してきたと考えていた。ところが、迫害を受けているのは人ではなくイエス自身だと、この声は言う。とするなら、自分はどれほどひどいことをしてきたのかと、彼は思ったに違いない。後にサウロは、「使徒と呼ばれる値うちのない者である」と言っているのもそのためだろう（1コリント15・9）。

この時、それまでの彼の考え方が、音をたてて崩れていった。イエスを人としてではなく、神として認めたのである。彼の心の向きは、このときに180度回転した。まさに回心である。

三、アナニヤの声

サウロは同行者に手を引かれてダマスコへ連れ

て行かれた。そして3日間飲食をしないで、ひたすら祈っていた（11節）。そのとき主は、△アナニヤというひとりの弟子▽に幻の中で現れ、サウロを訪問するように示された。迫害者サウロのことをわざわざ知っていたアナニヤは、最初は難色を示していたが、△あの人は、異邦人たち、王たち、またイスラエルの子らにも、わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である▽という主の言葉を聞いて、出かけたのである。主は、その直前、サウロにも、△アナニヤという人がはいつてきて、手を自分の上において再び見えるようにしてくれるのを▽幻で示されていたことも見逃してはならない。

主は、ご自身が語られるだけでなく、人を通して、しかも最高のタイミグで語られる。また、サウロの使命は、イスラエルの子たちだけでなく、△異邦人たち、王たち▽にも主の名を伝えることであると、主はアナニヤの声を通してはっきりと示された。確かにこれ以降、パウロはその通りの働きをすることになる。そしてアナニヤが手をおいたとき、△サウロの目からうるこのようなものが落ちて、元どおり見えるようになった▽。サウロの新しい生涯が始まったのである。

結論

主は今も、人の生き方を180度変えてくださる。そのために、その人の内心に語られ、ご自身が語られ、また人を用いて語られる。いずれの場合も、聖書の言葉が用いられることは確かだ。心を開いて、それらの声に耳を傾けよう。

研究資料

(足立)

使徒パウロは徹底的な回心を経験した。それはキリストご自身により総合的な方向転換がなされたと言わざるを得ない。ルカが使徒行伝において3回詳細にこの出来事を記しているのは、重要である(9・11〜30、22・3〜21、26・2〜23)。本書9・11〜30によると、教会迫害者からキリストの証人として迫害を受ける者となったパウロ、その完全な移行が強調されている。9・11〜22は、3つの区分に分けられる。ダマスコ途上の出来事(1〜9節)、アナニヤがパウロに関わる(10〜19前)、ダマスコのユダヤ人会堂での大胆な証しを通して、パウロの回心が最終的に確認される(18後〜22)。

テキスト

1〜2 この個所は年代かつ地理的状况を伝えているが、より重要なことは回心前のパウロを記録している点にある。彼の姿はダマスコ途上で主に出会った後と著しい違いがある。1節は8・3での記述を再開しているようである。パウロはなお教会のメンバーを確固たる敵として、迫害していた。パウロの役割は迫害実行者のひとりではなく、拘留する役人のそれであった。彼の意図は新しい動きを踏みつづすことにあった(参照26・10)。初めパウロの行為は、エルサレムとその周辺のキリスト者を逮捕していた(8・3、26・10)。その結果として活動範囲はダマスコにまで及んでいた。彼はこの時の大祭司(おそらくカヤパ)と交渉した。パウロが求めた内容は、外地の違法者を逮捕

しエルサレムに送還する権限を認めてもらうこと。キリスト者が **この道** に属する者たちとして言及されているのは、おそらくユダヤ人キリスト者共同体の初期の自己名称を反映しているのである(9・2、19・9、23、22・4、24・14、22)。この表現が、イエスの教えと直接関係しているかどうかはわからない(参照マタイ7・13〜14、ヨハネ14・6)。

3〜6 パウロがダマスコの近くに到着したとき、突然天からの偉大な光が彼を照らし出した。その光は強烈であつたに違いない。というのは時が真昼であつたから(参照22・6、26・13)。その光は天からの啓示を顕し、小さな一団を覆う聖なる栄光であつた。天からの啓示を伴う光に関しては、以下を参照(ルカ2・9、9・29、使徒12・7、22・6)。光に直撃されたパウロは地に倒れた。**パウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか** 名前を二度呼びかけるのは旧約にも福音書にも見受けられる(参照創世記22・11、出エジプト3・4、サムエル上3・10、ルカ8・24、10・41、22・31)。**主よ、あなたは、どなたですか** この時点でパウロは彼に語りかけたお方が復活のキリストであるとは自覚していなかった。しかし彼はその声が天からのメッセンジャーだと受けとめている。**わたしは、あなたが迫害しているイエスである** イエスはご自分の弟子たちを自身のからだと同視している。ここにキリスト信仰者はキリストのからだ(教会)であることが見事に提示されている(参照ルカ10・16、使徒9・1、1コリント12・27、エペソ4・12)。パウロはキリスト信者を迫害して

きたが、イエスは復活して栄光の主として教会を統治しておられた。ここでパウロ自身は、イエスが生きておられ、栄光のうちに統治している否定できない証拠を握った。今まで彼は教会を迫害し、復活の主ご自身を迫害してきた。しかしここで彼が復活の主と出会ったことが、間違いなく後に彼の教会論の原点となったであろう。**さあ立つて、町にはいつて行きなさい** このイエスの言葉は委任ではなく命令。パウロは町に入って更なる指示を待たねばならなかった。そこにはパウロが練り直すビジョンは何もなかった。ここでの強調点のすべてはパウロが復活の主を見たという事実だけ。パウロの回心における自らの証しは、彼が復活の主に出会ったという事実集中している(参照1コリント9・1、15・8、ガラテヤ1・16)。そしてこれで十分であつた。復活の主の確かさによってパウロは熱狂的迫害者から最も熱心なイエスの証人に造りかえられた。

7〜9 パウロの旅行の同伴者たちは、彼の上に起こった出来事が客観的な事実であることを真に証明することになった。彼らは、音は聞いたが復活の主を見ることは許されなかった。彼らは客観的に天からの顕現があつたことを実証できたが、天からの伝達に参加できなかった。結果復活の主を見ることもパウロに語られた言葉を聞くことも許されなかった。

参考文献 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』

(いのちのことば社)、Polhill, J.B., Acts

(Broadman), Larkin, W.J., Jr., Acts (IVP)

聖書

使徒行伝9・1～19

タイトル

サウロの回心

暗唱聖句

彼はいま祈っている。

目 標

使徒9・11

迫害者サウロをさえつくり変えられたキリストを信じる。

導入

(松浦)

先週学んだステパノは、石に打たれながら祈りつつ死んでいきました。今日は、そのステパノの様子を一部始終見ていた一人の青年のお話です。

迫害者サウロ

その青年の名前はサウロといいます。彼は、ステパノを殺すことに賛成していました。ステパノに石を投げつける人々は、上着を脱いでサウロ青年の足元に置きました。上着の番をしながら、石で打ち殺されてもイエス様を信じつづけるステパノの様子を見て、死をもいとわぬ恐ろしい力を持った新宗教だということで、彼らを絶滅してやろうと新たな闘志に燃えていました。

そこで彼は、イエス様を信じるクリスチャンを一人残らず捕えてしまおうと、家々に押し入って男や女を引きずり出して、次々と獄に渡し、教会を荒らし回りました。それだけでなく、エルサレムから逃げ出したクリスチャンがダマスコの町にいることを聞いたサウロは、大祭司の許可証をもらって遠いダマスコの町まで追いかけていきました。ダマスコに向かうサウロの顔は、憎しみのため目はぎらぎらと光り、鼻からハアッハアッハアッという荒い息がでていたことでしょう。

イエス様に出会ったサウロ

ところが、鼻息荒く道を急ぎながらダマスコの近くに来た時のことです。突然、天から光がさして、彼をめぐり照らしました。あまりにもまぶしい光で目が見えなくなり、地に倒れてしまいました。だが、その時、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞きました。そこで彼は「主よ、あなたは、どなたですか」と尋ねました。すると答えがあつて「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。さあ立つて町に入つて行きなさい。そうすれば、そこであなたのなすべき事が告げられるであろう」。サウロの同行者たちは、声は聞こえても、誰も見えなかったもので、ただただ驚き、物も言えずに立っていました。

われに返ったサウロは、地から起き上がつて目を開いてみましたが、何も見えません。そこで、人々は、彼の手を引いてダマスコへ連れて行きました。そこで、サウロは3日間、目が見えず、食べることも、飲むこともしないで、ひたすら祈っていました。

アナニヤに出会ったサウロ

ダマスコの町にアナニヤという主の弟子がいました。主が幻の中に現れ、「アナニヤよ」と呼びになると、彼は「主よ、わたしでございませう」と答えました。すると、主はこう言われました。「立つて、サウロというタルソ人を尋ねなさい。彼はいま祈っている」。アナニヤは主に答えました。「主よ、あの人がエルサレムで、どんなひどいことをあなたの聖徒たちにしたかについて聞いています。彼はこの町でも、あなたの御名を信じる者たちをみな捕える権限を、祭司長らから授けられているのです」と、行くことをためらいました。しかし、さらに主は語られました。「さあ、行きなさい。あ

の人は、異邦人たち、王たち、イスラエルの子らにも、わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である。わたしの名のために、彼がどんなに苦しまなければならぬかを、彼に知らせよう」。そこで、アナニヤは出かけて行つて、手をサウロの上において言いました。「兄弟サウロよ、あなたが来る途中で現れた主イエスは、あなたが再び見えるようになるため、聖霊に満たされるため、わたしをここにつかわされました。サウロに手を置いて言つた時、目からうろこのようなものが落ちて元どおり見えるようになりました。サウロは、心からイエス様を信じ、バプテスマを受け、新しく生まれ変わったのです。

人の生き方を変える力

イエス様は人の生き方を変える力のある方です。最後に一人の人を紹介しましょう。「ベン・ハー」という本を書いた小説家の証です。映画化されているのでDVDでも観ることができでしょう。19世紀のアメリカにルイス・ウォーレスという人がいました。彼は、キリスト教の間違いを何とか証明したいと考え、いろいろ勉強し、聖書も読み、イスラエルにも實際足を運んで、研究に研究を重ねました。しかし、イエス様のことを知れば知るほど、彼がどんなにすばらしい方であるかを知ったのです。そして、イエス様は復活された神の子であると証する者に変えられたのです。私たちも変えられてイエス様と共に歩む者となりましょう。

♪神のお子のイエスさま♪

(ふくいんこどもさんびか74)



聖書 使徒10・9～22

テーマ ペテロの夢

序論

(鎌野)

9章で、神は異邦人伝道を中心となる人物を備えられたことを見た。さらに神は10章で、異邦人伝道の障害となるユダヤ的な考えを変革するために、使徒ペテロに働きかけられる。2週連続でこのことを学ぼう。本書の著者は異邦人ルカであり、彼は福音書でも、信仰深い異邦人の百卒長について記していることに留意したい(ルカ7章)。神は、異邦人にも救いの福音が伝えられるために、最もふさわしい方法をおとりになった。

一、ふさわしい人

ペテロが初代教会で重要な指導者だったことを、本書は繰り返して述べてきた。9章では、女弟子をよみがえらせてもいる。また彼が、律法では汚れているとされた「皮なめし」の職にあるシモンシモンの家に泊まった(9・43)ことは、律法のかせから、ある程度解放されていたことを示唆している。コルネリオという百卒長にも注目しよう。彼は「神を敬う人」だった。この語は、「異邦人の中で割礼こそ受けなかったが、ユダヤ教の信仰を持っている人を意味している」(『新聖書注解』)。彼もその家族も、唯一の神を信じていた。しかし、イエスが救い主であることは知らなかった。神はこの二人を、福音が異邦人にも及ぶものであることを知らせるために用いられたのである。神の知恵はいかに深いことか。

二、ふさわしい時

ある日の3時頃、神は御使いをカイザリヤに住むコルネリオに遣わされた。彼は「絶えず神に祈をしていた」(2節)人なので、祈りの時かもしれない。御使いは、ヨッパからペテロを招くように告げた。そこで彼は、すぐに僕二人と護衛の兵卒をヨッパに送り出した。この2つの町は、直線距離で約50km離れている。相当急いで歩いたのだらう。翌日の正午近くにはヨッパに着いた。

ちょうどその頃、ペテロは祈をするため屋上にのぼった(敬虔なユダヤ人は、朝9時、正午、昼3時に祈ることを習慣としていた。祈っている間に彼は夢心地になり、奇妙な幻を見たのである。その内容は後述するが、ペテロが、いま見た幻はなんの事だろうか、ひとり思案にくれていると、ちょうどその時、コルネリオから送られた人たちが、シモンの家を尋ね当てて、その門口に立っていたのだ。

これは決して偶然ではない。神は、ことをなすのにふさわしい時を用意されている。パウロとアナニヤの場合もそうだった。しかも、これが祈りの時だったことは注目に値する。祈るとき、神は最善のことをなしてくださるのである。

三、ふさわしい夢(幻)

ペテロが見たのは、地上の四つ足や這うもの、また空の鳥など▽がはいった布が、天から地上に降りてきた幻である。そして、天から△それらをほふって食べなさい▽という声が聞こえてきた。しかし彼は、△わたしは今までに、清くないもの、

汚れたものは、何一つ食べたことがありません▽と答えた。レビ記11章に記されている汚れたものが入っているゆえに、たとい清いものであっても食べられないと、彼は判断したのである。汚れたものと清いものは、厳格に区別せねばならないというのが、律法の教えであった。しかしその後、△神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない▽という声が聞こえてきた。

11章で明らかになるが、これは、異邦人は汚れているという当時のユダヤ人の考え方を変革するために、神が示された幻であった。ペテロは、主イエスが「外から人の中にはいつて来るものは、人を汚し得ないことが、わからないのか」(マルコ7・18)と言われたのを聞いていたはずである。しかしそのペテロであつてさえ、旧来の考え方を変えるのは、至難のことであつた。

コルネリオからの使いが到着したとき、ペテロは幻について思いめぐらしていた。しかし、御霊が△彼らと一緒に出かけるがよい。わたしが彼らをよこしたのである▽と仰せられたので、翌日、彼らと旅立った。そして、来週学ぶように、異邦人でも信仰によって救われることが明らかにされるのである。たとい迷いながらも、御霊の心に心を開くことの大切さを教えられる。

結論

福音が異邦人にも伝えられるようになったからこそ、私たち日本人も救われた。現代でも、どんな人々にも福音は届けられねばならない。神からの語りかけに心を開こう。

研究資料

(足立)

神は、異邦人コルネリオがキリスト教会に入るため、またユダヤ人キリスト者ペテロが異邦人を教会の完全なメンバーとして受け入れるために、みわざを進められる。ルカはこのことのために1章と半分のスペースを割いている(10・11・18)。この主題は、異邦人が救い主としてイエス・キリストを受け入れること、賜物として聖霊を受けること、そして受洗することである。ルカは、神がペテロに異邦人に戸を開くよう求めたことを記している。ペテロは使徒たちを代表し、エルサレム教会の指導者であった。この理由で、パウロではなくペテロが歓迎する役割を担っている。

ペテロは、幼少期から異邦人の家に入ってはいけないことを学習してきたユダヤ人であって、ユダヤ人以外とは食卓を共にしてこなかった。彼はここで偏見に打ち勝つことを、またイエスを信じる異邦人を兄弟姉妹として受容することを学ばねばならない。幻を通して、神はペテロがコルネリオとその家族に出会う備えをされる。

この出来事は極めて重要であるが、最終的にはエルサレム会議でのペテロの証言(15・7・11)により繰り返され、決着を見ることになる。

テキスト

9・16 ヨッパはカイザリヤの南方約50km足らずのところに位置した。使者は、コルネリオが幻を見た同日、或いは翌朝早くそこを出たので、翌日の昼にはヨッパに到着した。その間にペテロは祈

るために、皮なめしシモンの家の屋上に上った。そして祈りつつも空腹で食事の用意を待つ間に、彼は夢心地になった。屋上はしばしば日よけで覆われていた。ペテロはそこで自分の感覚を失っていたのではなく、むしろ主の臨在が彼にのぞみ、彼は深い集中状態にあつたと推測される。彼は外部の感覚に関して部分的に或いは全く覚えがないようだが、神との交わりに関してははっきり聞き取れる状況下にあつたと思われる。ここでもペテロと異邦人を共に導く主導権を神が持つておられることは明らか。ペテロは天が開け、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りてくるのを見た。四隅はおそらく、幻の重要性が世界規模に及ぶ決定に言及しているのであろう(参照黙示録7・1)。

敷布の中には、地上のあらゆる種類の動物を代表するものが含まれていた。四つ足の動物、陸をはうもの、そして空の鳥。天からの声は、ペテロにその動物の中から屠殺して、空腹を満たすよう命じた。彼はその幻に困惑し、力強く拒んだ。その声が要求したことは、律法に厳しく反した(参照レビ記10・10、11・2・47、申命記14・3・21)。彼は今まで一度も不浄で汚れたものを食べたことがなかった。しかしその声は彼の抗議を無視し、再度命じ、付け加えた、**神がきよめたものを、清くないなど言ってはならない**。その命令は3度来た。その度毎にペテロは拒否し、更なる困惑に陥った。しかしイエスの教えと行為は天からの宣言に確かに道を備えるものであった(マルコ7・14・23、ルカ11・39・41)。そして十字架はこのた

めにも隔ての壁を打ち壊す土台であつた(エペソ2・14・15、コロサイ2・14)。天からの敷布と声の両方は、神の被造物はみなきよく、良きものと見なされ、拒否されるものではないと証言している(創世記1・31、1テモテ4・3)。

17・23 この時点でペテロは、幻の意味に関して尚暗やみの中にあつた。コルネリオの使者が皮なめしのシモンの家に到着したとき、まさに謎が解ける瞬間が迫ってきた。そして聖霊が彼に直接語りかけた。聖霊はペテロに三人の人の到着を知らせる。すべては聖なる導きによって調和して成り立つ。聖霊の方向付けに従ってペテロは、屋上から下に降りることを良しとし、訪ねてきた3人と一緒に出かけることを決心した。その男たちはペテロが必要とした情報に答えた。そして彼らはペテロにコルネリオの幻について伝えた。

ここでは特に二つのことが強調されている。それはコルネリオの信仰の篤さと神の導きである。10・4・6にある最初の幻の説明に対してわずかな進展がある。コルネリオがペテロから **お話を伺うように** と使者たちは彼に伝えた。ペテロは彼の幻の成り行きを見始めた。ペテロが理解し始めたことは、彼が客を招き入れたことにより実証されている。ペテロはかつて汚れると考えていた異邦人との交わりを既に持ち始めていた。

参考図書

小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』(いのちのつむぎ社) Kistemaker, S. J., Acts (Baker), Larkin, W. J., Jr., Acts (IVP), Polhill, J. B., Acts (Broadman)

聖書	使徒10・9～22
タイトル	神様のひろい心
暗唱聖句	神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない。
目 標	神からの語りかけに心を開こう。
	使徒10・15

導入

(小野)

夏です！思いっきり走ったり、とび回ったり、泳いだりしますか？ひろい海に行きましたか？まっ青なひろい空を眺めましたか？神様のハートもそのように、いえ、それ以上にひろいのです。そのハートから語りかけてくださる神様の声に私たちも心を開いて、聞いて受け入れて従いましょうというのが今日のメッセージです。「先入観」を知っていますか。センニユウカン？何かミルク入りの缶詰かな？いいえ、ちがいます。あることについて、前もって読んだり、聞いたたりしていて、頭の中に自分なりに分かっていますよ、ということ。これが頭の中にあると、ありのままをすなおに受け入れられなくなります。では、「固定観念」が分かれますか。このことは絶対にこうだ！としつかりと固まった考えをもっていることを言います。日本人だったら「郵便ポストは赤だ！」ときつと言ってしまうし、みんなもそうだと言います。ところがです、何と、ドイツに行くと、「郵便ポストも郵便局さえも黄色」なのです。えーっ？！そうなの？と思うでしょう。本当にそうなのです。神様は時々私たちを、そうした狭い考えから、神様の広い心にまで導いてくださいます。心を開いて耳をすますとね。

ペテロの夢

ペテロの場合は、「先入観」とか「固定観念」ともちよつと違うかもしれません。ペテロはユダヤ人として、きちんと神様の律法を守っていました。神様がくださった教えや戒めです。さて、ペテロに神様が見せられた夢とはどんなものだったでしょう？時はお昼の12時ごろ、ペテロは神様にお祈りをするために屋上にのぼりました。「お腹がすいたなあ、何か食べたいなあ」と思ううちに、ペテロは夢心地になりました。うつら、うつらといい気持ちになったのでしょうか。その時です！天が開け、大きな布のような入れ物が、四隅をつるされて、地上に降りて来るのを見ました。その中には、地上の四つ足や這うもの、また空の鳥など、各種の生きものがはいっていました。そして神様の声が聞こえてきたのです。「ペテロよ、立つて、それらをほふって食べなさい」と。ペテロは驚き戸惑いました。なぜならそこには清くない動物たちがいたからです。「主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないもの、汚れたものは、何一つ食べたことがありません」。野うさぎとか、豚とか、やもり、とかげ、カメレオンなどが入っていたのでしょうか。すると2度目に声がかかってきました。「神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない」。これが1回きりではなく、2回、3回とあって、入れ物はすぐ天に引き上げられました。

御霊の声

ペテロはしばらく考えこみました。「3回も天からくだってきた大きな布の中には、どう見ても、汚れたもので、食べてはならないと律法に定められている動物たちだったなあ…、岩たぬきもいた、

はげわし、とび、からす、だちょう、かもめ、ふくろう、ペリカン、はげたか、こうもり、こうのと、さぎ、もぐらねずみ、大とかげもいたか…。それなのに神様は、それらを清めたのだから、清くないと言ってはならないとおっしゃる。はて、はて、一体この夢は、何だろう？」と思いこふけていると、ちょうどその時、カイザリヤにいた百卒長コルネリオから送られた人たちが、ペテロがいたシモンの家を尋ね当てて、門口に立っていました。そして言います、「ペテロと呼ばれるシモンというかたが、こちらにお泊まりではございませんか」と。ペテロはなおも幻のことにについて、あれやこれや考えていると、御霊が言いました、「ごらんない三人の人たちが、あなたを尋ねてきている。さあ、立つて下に降り、ためらわないで、彼らと一緒に出かけろがよい。わたしが彼らをよこしたのである」と。そこでペテロは降りて行って、彼らが百卒長コルネリオの使いだと知りました。彼らもまた聖なる御使いに導かれていたこともはっきりとわかりました。

神様の広い心を悟らせてくださるのは、御霊ですね。ペテロはきちんとユダヤ人として、朝9時、12時、午後3時のお祈りをしていた人です。その時も12時のお祈りの頃でした。私たちもお祈りをする時に、神様の広い心を分からせていただけるのです。どんな広いお心かな？ペテロには分かりかけてきました。ユダヤ人だけでなく異邦人も救いに入られるんだなって！

(ホーリネスこどもさんびか53)



聖書 使徒10・34〜48 テーマ コルネリオ

序論

(金井)

8月から11月までは「信仰に生きる」という期題のもとに学んでいる。私たちの信仰の歩みは、私たち自身が持つ神理解によって大きく変わる。初代教会の人々の歩みを学ぶことによって、私たちの信仰の目を開かれ、神の大きさを理解したい。

一、宣教の拡大とペテロの迷い

まず、これまでの流れを振り返ってみよう。紀元30年のペンテコステ以降、神の人類救済事業の中心はユダヤ人から異邦人へと大きく移行しようとしていた。しかし、エルサレムに誕生した最初の教会はヘブライスト（ヘブル語やアラム語を日常的に使用するユダヤ人）が中心であった。彼らは主イエスから世界宣教命令を受けていたが、ユダヤ中心の選民思想を脱却できず、「エルサレム、ユダヤ」から外に出ようとはしなかった。

だが、エルサレム教会内部でも、ヘレニスト（ギリシア語を日常的に使う人々）であるディアスポラ（離散の民）が増えており、彼らは異邦人に対してオープンな思想と態度を持っていた。ステパノの殉教を機に起こった迫害によって、彼らはエルサレムから散らされていったが、それが「サマリヤ」への宣教拡大につながった（8・4〜5）。その迫害の後も、ヘブライストのキリスト者はエルサレムに残った。それは彼らが未だユダヤ教会のインサイダー（内部者）だったからである。

彼らは他のユダヤ人からユダヤ教の一分派「ナザレ派」（24・5）とみなされていたのである。

エルサレム教会の執事であったヘレニストのピリポはその頃、サマリヤ地方の各地で宣教活動を行い、エチオピア人の宦官に伝道して洗礼を授けた（8章）。エルサレム教会の指導者ペテロはサマリヤに行き、その地の信徒を承認したものの、彼にはなお異邦人への宣教について迷いがあった。

二、すべての者の主なるイエス

しかし、前回学んだように、主がペテロにお見せになった幻と、ローマ軍の百卒長コルネリオとの出会いによって、ようやくペテロの霊眼は神の異邦人宣教計画に対して開かれた。ペテロはこのように告白した、**「神は人をかたよりみないかたで、神を敬い義を行う者はどの国民でも受け入れて下さることが、ほんとうによくわかってきました」**。そして、ペテロは、神が**「すべての者の主」**としてイエス・キリストを遣わされたことを、コルネリオと彼の親族・友人に証した。

①ヨハネのバプテスマ運動の後に、②神は**「イエスに聖霊と力を注がれ」**た。③イエスはガリラヤで宣教を開始して、**「ユダヤ全土」**にこれを拡大し、④人々を悪魔から解放して癒された。⑤人々は**「イエスを木にかけて殺した」**が、⑥**「神はイエスを三日目によみがえらせ」**、⑦**「イエスは」**選ばれた者たちに現れ**「てくださった」**。⑧復活されたイエスは弟子たちと**「共に飲食」**された。⑨イエスは、**「ご自身が生者と死者との審判者として神に定められたかたであること」**を、人々に宣

べ伝え、証しするようにと弟子たちに命じられた。⑩預言されたとおり今やイエスを信じる者はすべて、その名によって罪の赦しが受けられる。これは初代教会の定型的な福音の使信である。

三、異邦人への聖霊降臨

ペテロがこの説教を語り終えないうちに、**「それ」**を聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった。彼らは諸々の言語で語り、神を賛美した。これは主イエスが言われた**「聖霊によるバプテスマ」**であり、あのペンテコステに自分たちが受けたのと同じ聖霊の賜物を彼らが受けたことをペテロは悟った（11・15〜17）。そこでペテロは彼らに**「イエス・キリストの名によって」**水のバプテスマを受けさせて、彼らを教会に受け入れた。

コルネリオはユダヤ教会堂の礼拝に集い、祈りと施しに励む**「神を敬う人」**であったが、割礼を受けて改宗者となるまでには至っていなかった。しかし今や、彼は割礼を受けることも食物規定等の律法の束縛を受けることも無く、イエス・キリストを信じるだけで罪が赦され、神の民に加わることができたのである。これ以降、異邦人が次々と主イエスを信じて教会に加わるようになった。

結論

現代の教会も新たな律法を作り、型にはまったクリスチャン像を押しつけることによって、人々をキリストの救いから遠ざけてはいないだろうか。私たちも言葉と御霊によって自分の心の中にある壁をブレイクスルー（突破）していただこう。

研究資料

(足立)

テキスト

34 **35** 一連の出来事が神のご意志によるものだとばかり理解したペテロは、福音を提示する。コルネリオとその家族は既に神を礼拝していたし、福音を受け入れる備えができていた。ペテロは異教徒に提示される基本的な一神教のメッセージから始めないで、彼らが既に得ていた知識に基づいて話し始めたのだろう。彼は、神は人を差別せず、どこの国の人も受け入れる、と強調している。ペテロは自分が見た幻によって、神は人種の間を差別をおかれないと言う、この基本的な洞察を得た。そこには、清い、清くないと言う差別はない。神を敬い義を行う者はどの国民でも受け入れて下さる(参照ルカ8・21)。ペテロはここで特にコルネリオを意識して話しているようにうかがえる。ルカの記録にもコルネリオの敬虔さが強調されている印象が残る(使徒10・2・3)。しかしこれは、コルネリオの敬虔さが彼をペテロに出会わせ、報いとしてキリストの救いに導かれたと言うことでは、決してない。アブラハムと同様、神ご自身がコルネリオを選び、ご自身を啓示し、信仰に導かれていたと言えよう。既にある主の恵みが彼を捉え、完全なキリストの福音に与るよう神が導いておられる。

36 ペテロの熟考した強調が、イエス・キリストにある神の行為に置かれている。神は福音のメッセージをご自分の民であるイスラエルの子らに送った。しかしその内容は平和で、すべての者

の主なるイエス・キリストによって もたらされる平和である。イエスが本当にすべての主なら、福音とキリストの平和はイスラエルの民だけでなく、すべての民族のためにある。この36節は、イザヤ52・7、57・19の反響(参照エペソ2・17)。ペテロは、キリストを万人の主と告白する人々の間に障害物を置かない自然な結論に導かれていた。

37 **38** 37節からイエスの生涯の見事な要約が始まり、42節まで続く。イエスの生涯に関して情報を提供する使徒たちの説教の中でも、この箇所はユニークである。ペテロの他の説教は、この箇所(10・39・40)同様キリストの死と復活を強調している。しかしながらコルネリオの家での説教だけは、イエスの初期伝道の梗概を提供している(10・37・38)。事実これらの節はマルコ伝に提示されているイエスの生涯の梗概をほとんど要約したものである。すなわち洗礼者ヨハネ、ガリラヤでの際立った癒(いや)しの伝道、そして十字架の死と復活。あなたがたは…こ存じでしょう この表現は興味深い(参照使徒26・26)。

39 **42** 39節でペテロは、イエスの伝道生涯全体(参照1・22)、とりわけ主の死と復活に関して使徒として証言した。5・30と同様、イエスの十字架刑に関して人々はこのイエスを木にかけて殺したと記されている。神はイエスを三日目によみがえらせ イエスを死者の中から復活させたのは、父なる神の御力。わたしたちは…共に飲食しました(参照ルカ24・30、41・43、使徒1・4)。この強調は、コルネリオのように異邦人に説教する際に重要であつただろう。というのは異邦人

には、からだの復活という考えは全く新しいものであつたから(参照17・18)。ペテロは、イエスが使徒たちにみ言葉の宣教(使徒1・8)を命じたことに言及し、証言を結論づけている(10・42)。そしてイエスこそ終末のさばきの日に神が任命したお方であることを、特に明確にしている。昇天される前、復活の主は、キリストの受難と復活が悔い改めと主の御名による罪の赦しに固く結びついていると弟子たちに宣言し、あらゆる民族にこの福音が弟子たちを証人として伝えられると予告した(ルカ24・46・48)。ペテロは、この復活の主の約束に基づいて、明確なメッセージを伝えたのだろう(10・43)。

44 **48** コルネリオたちが、ペテロが語るキリストによる罪の赦しの説教を聞いていたとき、突然聖霊がコルネリオの家に集まっていた異邦人すべての上に臨んだ。彼らは異言で語り、神を賛美し始めた。聖霊の力ある現れが異邦人に臨んだことは、聞き取られ、見取られるものであつた。ペテロとヨッパから来たユダヤ人キリスト者の兄弟たちはその出来事の証人となり、神が異邦人に賜物として聖霊をお与えになったことに仰天した。そしてペテロは異邦人の受洗を認めた。宦官(8・36)と同様、異邦人の受洗に何ら障害はなく、だれも妨げられない。そして彼らはキリスト者共同体に完全に含まれる。なお数日のあいだ滞在してもらった 必然的に食卓の交わりも含んでいる。

参考図書 小野静雄『使徒の働き』『実用聖書注解』(いのちのことば社)・Kistemaker, S.J., Acts (Baker)・Polhill, J.B., Acts (Broadman)

聖書

使徒10・34〜48

タイトル

おどろくばかりの恵み

目 標

イエスを信じる者はことごとく、その名によって罪のゆるしが受けられる。使徒10・43
異邦人にも福音の恵みが注がれることを知る。

導入

(小野)

夏休み真最中ですね。毎日、日記をつけているお友だちがいますか？あまり変わつたことはなくて、毎日同じようなことばかり書いてるよという人もいるかな？でももしかしたら、残りの休みの間に、何かあるかも！実は、今日学ぶ聖書の箇所は、私たち日本人にとつて、すごく大きな記念すべきことが書かれていたのです。8月と言えば、日本人が記憶している、また記録している大きな出来事はいくつかありますね。8月6日は、広島原爆記念日、8月9日は、長崎原爆記念日、悲しいこれらの記念日は、私たちの心に平和の祈りをわきおこさせます。そして8月15日は、戦争が終わつた記念日です。このような記念日を覚えておくことは大切ですね。ところが、今日の学びは、ビックリするような、うれしい、うれしいグッド・ニュースについてなのです。へえ、一体どんなことでしょうね。

人をかたよりみたユダヤ人

ユダヤ人たちは、自分たちは特別に神様から選ばれた選民だ、他の民族国民とは全然違うのだ。自分たちの先祖はアブラハムだ、そして、モーセを通してあの大きな戒めをもらっている民族だぞ。神様

の律法をちゃんと守ってきたのだ。1年に3度エルサレムに宮もうでをして神様を礼拝しているし、生まれて8日目には男子はみんな、神様の民のしるしとして割礼を受けているし、律法の中に定められている戒めも守っている。食べてもよいと記されている動物だけは食べているけれど、食べてはいけないと書かれているものは絶対に食べたりしないぞ。自分たちは神様の宝の民なのだ。唯一のまことの神様を信じていない異邦人とは違うのだ。ユダヤ人たちはユダヤ人以外の人々のことを異邦人と呼び、ひどい時には、「犬」などと言っていました。神の豊かな愛と恵みは、ユダヤ人へのみ注がれているかのように誇らしげにしていました。そんなユダヤ人の考え方がグラグラとゆさぶられるようなできごとが起こつたのでした。それが今日のところですよ。

人をかたよりみない神

ペテロもレッキとしたユダヤ人です。他のユダヤ人と同じように考えていたのですが、あの日、正午のお祈りの時、ビックリするようなことが起こつたのでした。神様のみ声を聞くうちに、そして、コルネリオの使いの人々が尋ねて来てくれたことを通して、神様が驚くべきことをされようとしていたのが分かってきました。コルネリオは親族や親しい友人たちを呼び集めて、ペテロのくるのを待っていました。大ぜいの人でいっぱいになっていた部屋に入って行きました。コルネリオとそこにいた人々は、ペテロを通して、主が何を告げようとしておられるかを聞くこととして、一同、神の面前にまかり出たのでした。

そこでペテロは口を開いて、語り始めました、「神は人をかたよりみないかたで、神を敬い義を行う者は

はどの国民でも受け入れて下さることが、ほんとうによくわかってきました」と。「キリストはすべての者の主です。神からの聖霊と力をいただいて良い働きをしながら巡回されました。やがて木にかけられて殺されましたが、3日目によみがえられたのです。このイエスを信じる者はことごとく、その名によって罪のゆるしが受けられるのです」。ペテロの説教がまだ終わらないうちに、お話を聞いていたみんなの人たちに聖霊が降りました！ペテロに付いて来た人たちはビックリ仰天！「おお、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたぞ」と。その人々は異言を語って神をさんびしていたのでした。自分たちが聖霊のバプテスマにあずかつたと同じように、彼らも聖霊を受けたからには、彼らに水でバプテスマを授けるのを誰がこぼみ得ようかと、ペテロはその人々に命じて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けさせました。何という驚くべき恵み！彼らは割礼を受ける必要もないし、あれを食べてもよい、これは食べてはならないなどという律法からも解放されたのです。何という驚くべき恵みの世界が拡げられていったのでしょうか！

そのようにして、すべての異邦人へも救いの門が開かれていき、ついに、たくさんの方々を伴ひこの国、日本へも福音が届いて、今日、私たちは、この驚くべき恵みのメッセーじに聞き入っています。また何人かの人たちはもうその救いの恵みに入れられているのです。イエス様を信じるだけで罪のゆるしを受けて！ハレルヤです。

(新聖歌 233)



聖書 使徒12・13 17

テーマ ペテロの解放

序論

(金井)

宣教は、神が計画し主導しておられる神の事業である。まことに主は生きて働いておられる。それゆえに教会はいかなる困難をも乗り越えていくはずである。問題は、私たちがどこまでこのお方の偉大な力を認めて信頼するか、ではないか。生ける神のみ業を学び、信仰を強められたい。

一、ヘロデ王による迫害

紀元41年にヘロデ・アグリッパ1世(前11年生、後44年没)がユダヤ王に即位した。彼はヘロデ大王の孫であり、ローマ皇帝カリギュラに取り入ってこの地位を得た。

43年頃にヘロデ王はユダヤ教徒の人気を得ようとしてキリスト教徒を迫害し、12使徒の一人であったヘヨハネの兄弟ヤコブをつるぎで切り殺した。さらに王はキリスト教会のトップリーダーであったペテロを捕らえて、投獄した。それは出エジプトを記念する除酵祭の時のことであった。王はヘロデの祭のあとで、彼を民衆の前に引き出して、処刑するつもりであった。

教会では、彼のために熱心な祈りが神にささげられた。

二、主の御使いによる解放

ヘロデが彼を引き出そうとしていたその夜、ペテロは二重の鎖につながれ、ふたりの兵卒の間

に置かれて眠っていた。四人一組の兵卒四組が交代で見張りをしていた。二人がペテロの両脇を固め、二人が牢の外を固めていたのである。

すると、突然、主の使がそばに立ち、光が獄内を照した。そして御使はペテロのわき腹をつついて起し、「早く起きあがりなさい」と言った。すると鎖が彼の両手から、はずれ落ちた。御使いは彼を連れて、二つの衛所を通り抜けた。鉄門はひとりでに開き、外に出てから御使いは去った。

ペテロには御使のしわざが現実のこととは考えられず、ただ幻を見ているように思われた。しかし、御使いが去ってから、ヘロデはわれにかえって、主が自分を救い出してくださったのだとわかった。

それからペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家に行った。このマルコはバルナバのいとこであり、バルナバやパウロと共に伝道旅行をして、後にローマでペテロとパウロに仕え、「マルコによる福音書」を記した人物である。彼の母マリヤの家はエルサレム教会の集会所として用いられていた。

その家には大ぜいの人が集まって祈っていた。ところが、ペテロがその家の門まで来たことを女中が家の中にいる人たちに告げても、彼らは信じなかった。人々は彼女に「あなたは気が狂っている」とまで言った。熱心な祈りとは裏腹に、生ける神のみ業を信じないこの不信仰は、いったいどうしたことか。

彼女が自分の言うことに間違いないと、言い張った。すると彼らは、それはペテロの守護

天使だろうと決めつけた。しかし、ペテロが門をたたきつづけるので、彼らがあけると、そこにペテロがいたのを見て驚いた。

三、王の死と宣教の拡大

ペテロは手を振って彼らを静め、主が獄から彼を連れ出して下さった次第を説明し、「このことを、ヤコブやほかの兄弟たちに伝えて下さい」と言い残して、どこかほかの所へ出て行った。

この頃には主イエスの弟のヤコブがエルサレム教会の指導者として頭角を現していた。ペテロはすぐにそこを出て、各地で宣教活動続けた。

その後もヘロデ王はあらゆる所で傲慢な態度をとった。彼が演説をした時、人々は「これは神の声だ、人間の声ではない」と叫んだ。するとたちまち、主の使が彼を打った。神に栄光を帰することをしなかったからである。彼は虫にかまれて息が絶えてしまった。即位してわずか3年後のことである。その後、主の言はますます盛んにひろまって行った。

結論

キリスト者は権力者によって迫害されることもある。ヨハネの兄弟ヤコブのように殉教する者もいる。ただし、神のみ許し無しには一羽の雀さえ地に落ちない。私たちは自分の務めを果たし終えるまでは神に守られ、生かされ続けるのである。神の力強いみ手によって、鎖は解かれ、閉ざされた門も開かれていく。神に信頼して共に祈ろう。何ものも神のみ業をとどめることはできない。

研究資料

(足立)

アンテオケ教会設立(11・19〜30)を一見した後、12章では関心が再度エルサレムに向けられる。ステパノの死に次いで起こった迫害(8・1)に影響されず、使徒たちのかなりの者が留まっていたなら、ヘロデ・アグリッパがユダヤで見せかけの統治をしていた頃、状況は根底から変わった。そこで使徒たちは、キリスト者を抑圧するため奔走する王の格好の的となった。ヤコブは殉教し、そしてペテロは同じ運命をたどるかのようには捕らえられた。しかし神が背後におられ、ヘロデ王は流れをつかむことさえできなかった。事実王は神に敵対し、征服された(12・23、参照5・39、11・17)。12章の構成は、ヘロデによるペテロ逮捕(1〜5)、天使による解放(6〜11)、祈りにある教会(12〜17)、ヘロデの反動(18〜19)、ヘロデ・アグリッパ1世の死(20〜25)、と位置づけられよう。

テキスト

1 **ヘロデ王** とはヘロデ・アグリッパ1世(紀元前10〜紀元後44)。彼はヘロデ大王(ルカ1・5)の孫息子で、国主ヘロデ(ルカ3・19、13・31、23・7〜12)の甥にあたる。彼は紀元41〜44年までユダヤの王であった。

2 アグリッパによるキリスト教徒迫害は、**ヨハネの兄弟ヤコブをつるぎで切り殺す**ことで始まった。ヤコブは使徒たちの中で最初の殉教者となった。彼の死によってイエスの約束が成就したことになる(参照マルコ10・39)。

3〜5 ヤコブを処刑することによりユダヤ人か

らポイントを稼いだので、アグリッパは使徒たちの長であるペテロにも手を伸ばし、彼を逮捕し、獄につないだ。なぜ **ユダヤ人たちの意になかった**のかは述べられていない。ルカは **除酵祭の時のことであつた**と記している。アグリッパの意図は、祭の期間が終わり次第ペテロを引き出して、公衆の面前で処刑することにあつた。**四人一組の兵卒四組に引き渡して**これは囚人を脱獄させる動きに特別な警戒を払ったことを意味する。情報としてアグリッパの耳に、ユダヤ人議会から使徒たちの動向が報告されていたと思われる(参照5・19)。一方ペテロが獄で待つ間、教会では最も効果的な援助の手段が使われていた。祈りの力を悟らないアグリッパ。彼の企ては不十分で不毛に終わる。**熱心な祈り**ペテロの解放のために教会は熱烈に神に嘆願した(参照ルカ22・44、ヤコブ5・16)。神の民として祈りは自然な姿(使徒1・14、24、2・42、6・4、13・2)。

6〜11 ペテロ救出の出来事は、注目すべきことから始まっている。すなわちそれはペテロの審理が行われる前夜であつた。ペテロは眠って、2本の鎖につながれて、両脇を二人の兵士に挟まれていた、と記されている。しかも戸口では番兵たちが牢を監視していた。ところが突然主の御使いが現れ、天の光の輝きが牢を満たした。ペテロはなお眠っており、御使いが彼を起こさねばならなかった。ペテロは実際に起こっていることを理解していなかった。御使いのペテロへの言葉は短い。「急いで立て」、「帯を締め、靴を履け」、「上着を着て、私について来なさい」。ペテロは、この出来事全体を通して完全な受け身であつた。彼は御使いの命令に忠実に従った。しかし半分眠り眼で、ある種

の幻を見ていると想像していた。彼らは第一の衛兵所、第二の衛兵所を安全に通り返し、町に通じる鉄の門のところまで来た。おそらく主からの深い眠りが、番兵たちを眠らせたのであろう(参照サムエル上26・12)。問題は鉄の門であつたが、門がひとり

で開いて彼らを通した。そして彼らは外に出て、更に次の通りまで歩いて行った。安全が確保されると、御使いはペテロから消えた。その時になって初めてペテロは、神が自分をヘロデの手中と待ちかまえていた死から事実救いだしてくださったと、完全に理解するようになった。

12 ペテロのために熱心に祈ってきたキリスト者共同体に場面が移行する(12〜17)。一つのグループがヨハネ・マルコの母の家に集まっていた、そこにペテロが向かう。ヨハネ・マルコはまもなくパウロとバルナバによる第一次伝道旅行で重要な役割を担うようになる(12・25、13・5、13、15・37、39)。

13〜14 **ペテロが門口に立っている**ロダは祈り会を中断させるほど、興奮して叫んだ。

15〜16 ペテロのために熱心に祈ってきた集団が、祈りの答えとして、戸の外でドアを叩き続けるペテロを幽霊だとしか信じられない現実。

17 この節は基本的な三つの情報を提供している。①ペテロが奇跡的に救われた報告。②この知らせをヤコブらに伝えるよう指示。③ペテロがアグリッパの怒りから逃れ得る場所に出発する。

参考図書 F・F・ブルース『使徒行伝』(聖書図書刊行会)、Kistemaker, S.J., Acts (Baker), Larkin, W.J., Jr. Acts (IVP), Polhill, J.B., Acts (Broadman)。

聖書

使徒12・1～17

タイトル

お祈りの力

暗唱聖句

教会では、彼のために熱心な祈りが神にささげられた。

使徒12・5

目標

教会の祈りの力の大きさを確信する。

導入

(小野)

ペンテコステの日に教会がこの地上に誕生してから、いろいろなことがありましたね。イエス様がお弟子さんたちに、こんなことを言われていたと、ふと思ひ出します。

「わたしがあなたがたをつかわすのは、羊をおかみの中に送るようなものである」(マタイ10・16)。うわあ、こわい、羊たちは大丈夫なのかなあと、思っています。ところが、大丈夫なのです。なぜって、羊のためには必ずや羊飼いの守りがあるからなのです。今日もそんなできごとを見てみましょう。

この世の力

紀元41年にユダヤ王に即位したのはヘロデ・アグリッパ1世でした。ここにヘロデ王と書かれてある人で、この人は、イエス様がお生れになった頃王様だったヘロデ大王の孫にあたる人でした。この王様が、まさにおおかみのような王様で、ユダヤ教徒の人気を勝ち取ろうとして、キリスト教徒を迫害しはじめたのです。紀元43年のことでした。イエス様の12弟子の一人、ヨハネの兄弟ヤコブをつるぎで切り殺しました。そのことをユダヤ人たちが気に入ったようにみえたので、次には教会のリーダーだったペテロをも捕えてしまいまし

た。さらに獄にとじこめ4人1組の兵卒4組に引き渡して、しつかりと見張りをさせておいたのです。過越の祭が終わったならば、ペテロを引き出して殺す予定だったのです。

さあ、大変です。リーダーを失ってしまった羊たちですよ。一体どうなっていくのでしょうか!? この世の力には何というスゴミがあるのでしょうかね。果して、弱い羊のようなクリスチャンたちは本当に大丈夫なのでしょうか?

お祈りの力

弱い弱い羊のようなクリスチャンたちに、一体何ができるのでしょうか? できるのです! 「教会では、彼のために熱心な祈りが神にささげられた」(5節)。そう、これです、これです。ヘロデ王の権力の前にも、ペテロが鎖につながれていた獄屋の前にも、恐れることはありません。弟子たちは「ひたすら」祈りました。「熱心に」祈りました。なぜなら、そのときの彼らにとつては、祈ることしかできなかったし、それが神様の求められることでした。教会ではそうして、ペテロのために熱心な祈りが神様にささげられていました。ペテロはどうなっていたでしょう? ヘロデがペテロを獄から引き出して殺そうとしていた、その夜のことで、ペテロは二重の鎖につながれて二人の兵卒の間に置かれて、何と眠っていたのです。不思議な神様の平安に包まれていたのでしょうか。すると突然! 主の使いがそばに立って、光が獄内を照しました。御使いがペテロのわき腹をつつき起こして言います。「早く起きあがりなさい」。すると鎖が両手からはずれ落ちたではありませんか! 「帯をしめ、くつをはきなさい」。「上着を着て、ついてきなさい」。御使いの言葉の通りになってペテ

ロは御使いと共に、第一、第二の衛所を通りすぎ、町に抜ける鉄門のところに来ました。その鉄門は誰もさわらないのに、すーっとひとりでに開きました。そこを出て一つの通路に進んだとたんに、御使いはペテロから離れ去りました。その時ペテロはハッとわれにかえって、「ああ、今はじめて、ほんとうのことがわかった! 主が御使をつかわして、ヘロデの手から、またユダヤ人による災から、わたしを救い出して下さったのだ」と言いました。すぐに、マルコと呼ばれるヨハネの母マリヤの家に行きました。その家には大ぜいの人が集まって祈っていたのです。ペテロが門をたたくと、お手伝いのロダが出てきました。ペテロの声だとわかると、喜びのあまり、門をあけもしないで家に駆け込み、「ペテロが門口に立っています!」と報告をしました。人々は「えーっ! あなたは気が狂っているのでは」と言うので、ロダはますますキツパリと言いました。それでも「それはペテロの御使だろう」と言います。しかし、ペテロが門をたたき続けるので、戸を開けるとペテロがそこにいて一同アツと驚きました! 何という神様の奇跡! それはお祈りの力によりました。教会の祈りが神様に届き、そこにこの世のすべての力にまさる力が発揮されたのです。

あなたはこのお祈りの力を知っていますか? 信じていますか? 教会に行ってお祈りしましょう! 心を合わせてお祈りしつづけて、今も生きて働いていてくださる神様に、おおいに期待しましょう。

♪祈ってごらんよわかるから♪ (新聖歌48)



聖書 使徒14・8～18 テーマ ルステラにて

序論

(金井)

私たちは異教社会日本で伝道することの困難を体験している。しかし、全能の神は必ずこの国の霊の壁を破ってください。パウロの異邦人宣教を学び、私たちの心を主に燃やしていただきたい。

一、異邦人宣教への導き

紀元30年代から40年代にかけて、シリアの大都市アンテオケでは異邦人キリスト者が急増した(11・20～21)。その噂を聞いたエルサレム教会はバルナバをアンテオケ教会に派遣した。以後、彼はこの教会の指導者となった(11・22～24)。

35年頃にパウロ(これはラテン語系の家名らしい。ヘブル語系の名前はサウロ)がエルサレムに上京した際に、バルナバは彼を使徒たちにとりなしたことがあった(9・27)。その後パウロは故郷タルソに帰っていたが、40年代中頃にバルナバは彼を訪ねていき、アンテオケに連れ帰って、伝道牧会の同労者とした(11・25～26)。こうしてパウロはアンテオケ教会の教師となり、この教会から派遣され、支援されて宣教旅行をしたのである(13・1～3、14・26～28、15・35、18・22～23)。

パウロがダマスコ城外で回心したのは33年であった。彼はその時に主から異邦人宣教の召命を受けていた(9・15、26・17、ガラテヤ1・16)。しかし、彼が最初に宣教旅行に出たのは、それから10年以上過ぎた47年であった。宣教には準備が必

要であり、教会の支援が不可欠なのである。

二、しるしと奇跡によるみ言葉の証し

聖霊のみ告げに従ってバルナバとパウロは宣教旅行を始めた(13・2～3)。彼らが最初に向かったのはバルナバの故郷クプロ島である(13・4～12)。その次に彼らが向かったのは小アジアであった。二人は地中海を渡り、ケストロス川を上ってペルガに上陸し、ピシデヤのアンテオケに行つて、その地の人々にキリストの福音を伝えた(13・13～49)。しかし、ユダヤ人から迫害を受けたため、二人はイコニオムへ逃れて、そこで伝道した(13・50～14・3)。そこでもユダヤ人から迫害を受けたため、二人はルステラやデルベ、その付近に逃れて宣教を続けた(14・4～7)。ピシデヤのアンテオケとイコニオム、ルステラは標高1千メートルを超え、高地にあるが、ここをローマ帝国の大動脈「皇帝街道」が通っていた。今日のテキストはパウロがルステラで宣教した時の記録である。

ルステラでは、生まれながら足の不自由な男がパウロの説教を聴いていた。パウロは彼をじつと見て、いやされるほどの信仰が彼にあるのを認め、大声で「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言った。すると彼は踊り上がった歩き出した。この男は「歩いた経験が全くなかった」のだから、これは完全に奇跡である。この宣教旅行において「主は、彼らの手によつてしるしと奇跡とを行わせ、そのめぐみの言葉をあかしされた」のである(14・3)。

三、創造主の証し

群衆はこの奇跡を見て、バルナバとパウロはギリシア神話の神「ゼウス」と「ヘルメス」の化身であると誤解した。「ゼウス神殿の祭司」は「ふたりに犠牲をささげよう」とした。東西文化の交流によつて多数の外国の宗教がこの地方に持ち込まれており、町は偶像に満ちていたのである。

「バルナバとパウロとは、これを聞いて自分の上着を引き裂いた。これは汚し事に対する恐れを表している。二人は「群衆の中に飛び込んで行き」、真の神について次のように教えた。

①真の神は「天と地と海と、その中のすべてのものをお造りになった」お方である。人間や偶像は神ではない。②神はこれまでも「あなたがたのために天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与えになつて」いる。③「神は過ぎ去つた時代には、すべての国々の人が、それぞれの道を行くままにしておかれたが、キリストの来臨によつて時代は変わった。あなたがたは「生ける神」に立ち帰らなければならない。

パウロの教えに反対するユダヤ人はここにも押しかけてきて、彼を石打ちにした。しかし、パウロは起き上がった、宣教旅行を続けたのである。

結論

神は今、日本の人々にも、悔い改めてご自身に立ち帰ることを求めておられる。偶像を拝み、悪魔の虜となつてゐる人々に、創造主であり、私たちを生かしてくださつてゐる真の神を伝えよう。

研究資料

(足立)

14章での主要な出来事はルステラで起こっている。それは生まれつき歩けない人をパウロが癒したことに始まった(8・10)。このことで生粋のルステラ人たちから著しい行動が生じ、彼らは使徒たちを神々として崇めようとした(11・13)。逆に人物崇拜によってパウロとバルナバによる強い抵抗が生じ、彼らは小説教をした(14・18)。皮肉にもルステラ伝道は、パウロとバルナバを礼拝しようとした同じ聴衆がパウロに石を投げて殺そうとする結果となった(19・20a)。この段落は、デルベで成されたみわざを手短に記して終えている(20b・21a)。

テキスト

8・10 この節に出てくる足のきかない男への癒しは、ペテロによるアイネヤの癒し(9・32・35)と共通の特徴があるし、美しの門での足のきかない人の癒し(3・2・10)と特に重なる点が多い。美しの門の男と同様、この男は生まれながら歩けなかった。又同様にこの男が癒されたとき、飛び上がって歩き出した。この男はおぼろげな信仰(9)を示した。おそらくパウロが語ることに応答したのであろう。信仰はイエスの癒しの奇跡としばしば結びついている。癒しの後で、「あなたの信仰があなたを癒した」(参照ルカ7・50、8・48、17・19、18・42)という言葉が、イエスによってたいいて言及されている。美しの門の場合も、癒しのストーリーそのものに信仰の言及はないが、ペテ

ロが直後の説教で信仰に言及しているように認められる(使徒3・16)。どの出来事も癒しは最大限簡潔に語られている。パウロは彼に立つよう命じ、男は即座に飛び上がり、歩き回り始めた。ここではイエスの御名による言及はないが、最初の読者たちは、奇跡が神聖な力を通して起こることを知る十分な実例を持っていた(参照3・16、4・30、9・34)。ルステラの人々はこのことを知らず、この無知が彼らを誤った行動に駆り立てた。

11・13 ルステラにはユダヤ人の会堂がなかったが、そこにはテモテの家と彼のユダヤ人の母(16・1)がいたので、少なくとも一つのユダヤ家系の家族がいた。しかしながら概してルステラは根本的に異邦人の異教徒から成り立っていただろう。したがって歩けない人の癒しに対する彼らの反応は、その背景を反映している。神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお下りになったのだ。この時点でパウロとバルナバは生じることを察知していなかった。なぜならば群衆の叫びが土着のルカオニヤ方言によるものであったから。人々は、神々が自分たちを訪問しに来たという受け取り方をした。彼らはバルナバをゼウス(ギリシアの万神殿の主神)と呼び、パウロが主に語っていたのでヘルメス(ゼウスの子で、神々の使者)と呼んだ。パウロとバルナバは、ゼウスの祭司が犠牲として牛数頭とともに到着したとき、何かが進行中だと感じ始めた。

14・18 二人の使徒は何が起ころうとしているか充分に察知した。彼らは着物を裂いて、群衆の中に飛び込んだ。着物を裂くことは、聖書中に見受

けられる動作である(参照創世記37・29、34、ヨシア7・6、マルコ14・63等)。ここでの動作は猛烈的な抗議を表し、意図された犠牲を阻止するために考えられたこと。わたしたちとても、あなたがたと同じような人間である。二人はそのような冒瀆行為の一行には加われない。ヘロデ・アンティパスは神としての尊敬を自らに得ようとして、墓穴を掘った(12・22・23)。目で見て触れることが可能な神々、また人に似せた神々を欲することは人間の本性のように思える。いつの時代でも人は褒められたい誘惑に屈しやすい。奉仕者はヘロデから警告を学び、使徒たちの実例に従うべきである。

二人は群衆の興味にわたって入り、小説教というかたちで自分たちの抗議を説明した(15・18)。これは、生粋の異教徒集団への説教としては使徒行伝で最初のものである。使徒たちはキリストの到来からではなく、唯一神(申命記6・4)という基礎的な前提から始めねばならなかった。この説教はアレオパゴスでの呼びかけ(17・22・31)にも共通するものである。パウロは導入から彼らの偶像礼拝のむなしさを扱う。異教徒の多神教は存在しない神々を拝む空虚なもの(参照エレミヤ2・5、ローマ1・21・23)。存在するのは生ける神だけ。おそらく詩篇146・6の引用であるが、創造主を明確に主張。そして彼は神の忍耐とあわれみを説いている。最後は、自然の摂理のみわざに神はご自身を啓示されてきたことを指摘。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』(いのちのことば社)・Kistemaker, S. J.: Acts (Baker), Polhill, J. B.: Acts (Broadman)。

聖書 使徒14・8～18

タイトル まことの神様に帰ろう

暗唱聖句 天と地と海と、その中のすべての

ものをお造りになった生ける神

に立ち帰るように…使徒14・15

目標 偶像を捨てて、まことの神に立

ち帰ろう。

導入

(小野)

暑い夏も終りに近付きました。毎週教会学校に励むことができたか？らくらくと教会へ行くことができなかった日もあったかもしれませんね。眠い日もあったり、病気にもなったりで、教会生活もいろいろな戦いに勝っていかねければなりませんね。

教会が誕生した頃のクリスチャンたちも戦うクリスチャンたちでした。さあ、どんな戦いをしたのでしょうか。

生ける神のみわざ

7月30日に学んだサウロ、みごとに回心して、大迫害者から、大使徒になりました。名前もパウロになって、イエス様の福音を伝えるために、大いに用いられる人となりました。イエス様の福音を伝えたくて、伝えたくて、伝道旅行に出ました。まずは第一回目の伝道旅行です。ルステラという所での出来事を見ましょう。ルステラに来たのも、実はその前に行ったイコニウムで、大胆にイエス様のことを語り、しるしと奇跡とを行っていたら、異邦人やユダヤ人が役人たちと一緒に反対運動を起して、石で打とうとしたので、ルステラの町へのがれてきたというわけでした。そこに生れなが

ら一度も歩いたことがないという人が座っていました。その人はパウロがイエス様のことを話しているのを聞いていました。パウロはその人をじっと見て、いやされると信じて聞いているようだなと思ひ、大声で、「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言ったのです。すると、どうでしょう！彼は躍り上がった歩き出したではありませんか！今まで一度も歩いたことがなかった人がです！ビックリしたのはそこにいた大勢の人々でした。彼らは声を張りあげて、ルカオニヤの地方語で叫びました。「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお下りになったのだ！」と。人々は、バルナバをゼウス神と呼び、パウロはよく話していたので、ヘルメス神と呼びました。これらはギリシャの神々でした。おまけにゼウス神殿の祭司が、群衆と一緒に、二人に犠牲をささげようとして、雄牛数頭と花輪とを門前に持つてくるではありませんか！今度はバルナバとパウロの方がびっくり仰天。上着を引き裂き、群衆の中に飛び込んで行つて叫びました。

生ける神への招き

「あなたがたが拝んでいる空しい神々を捨てて、天と地と海と、その中のすべてのものをお造りになった生ける神に立ち帰るようにと、イエス・キリストの福音を伝えてくれる者たちなのです。神様はこれまで、すべての国々の人が、それぞれの道を行くままにしておかれたのですが、それでもちゃんと、ご自分のことをあかししてこられているのです。つまり、あなたがたのために天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、

あなたがたの心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与えになっておられるのですよ」。こう言つて、やつとのことで、二人は群衆が自分たちに犠牲をささげるのを思い止まらせたのでした！「偶像礼拝」との戦いですね。人間が神として拝まれたり、犠牲をささげられたり、お供え物をされたりしては大変です。

ところが今、私たちの周りに似たようなことがないかしら？立派な人が亡くなると祭られて神様になります。愛する家族の一人が亡くなると、仏様として拝まれたりします。また、このバルナバやパウロのようにビックリするようなことをする人、あるいはタレントやスポーツ選手とか、魅力たっぷりの人を神様のようにして拝む人もあるかもしれません。でも人間はどんなにすごいことができても、どこまでもいつても神様に造られた人間です。さらに日本には、キツネやワニのような動物を拝む人もいます。こういう人たちはみんな偶像は人が作ったもので、絶対に私たちを恐ろしい罪と永遠の滅びからは救い出してくれないということを知りません。生けるまことの神様はただお一人です。天と地と海と、その中のすべてのもの、すなわち、私たち人間をも造つてくださった神様。そして罪に陥つた私たち人間を永遠の滅びから救うために、イエス・キリストを身代わりとして十字架にかけてくださった神様ただお一人です。あなたはもうこの神様のもとに立ち帰っていますか？もしまだでしたら、罪をおわびして、十字架を信じて、生けるまことの神様に立ち帰り、振起日を迎えましょう。

♪まことの神様ただひとり♪(ふくん子どもさんびか)



聖書 使徒16・16～34 テーマ 獄屋にて

序論

(金井)

今日は、パウロのピリピでの宣教の経験を通して、開拓伝道と救霊について学びたい。

一、マケドニアでの開拓伝道

パウロは第2回宣教旅行(49～52年)ではシラスを伴い、陸路を通って小アジアの諸教会を訪問した(15・41～16・8)。そして、彼らは聖霊の導きと幻によってエーゲ海を渡り、マケドニア州第1区の都市ピリピにきた(16・9～12)。ピリピはローマの退役軍人が多く住む植民都市で、エグナティア街道が通る軍事・通商の要所であった。

使徒行伝によれば、パウロは通常、どの町でもまずユダヤ人から伝道を始めている。ピリピではユダヤ教会堂を見つけられなかったため、パウロたちはユダヤ人たちが祈り場としている川岸に行つて伝道した。そこで神を敬う婦人ルデヤが救われた。彼女は小アジア・テアテラの出身で、紫布を商う富裕な人であった。以後、彼女の邸宅が宣教の拠点となったのである(16・13～15、40)。開拓伝道を展開するためには、①まず祈つて主の導きに従い、②良い拠点を選び、③戦略を立てて、④訓練された教師が、⑤教会から派遣され、支援を受けつつ、⑥良き信徒の同労者と共に、⑦地域の人々との接点を作りながら伝道していくことが大切である。神は時にかなった導きを与え、すべての必要を満たしてくださる。

二、イエスの御名による霊的解放

パウロたちがピリピで伝道していると、△占いの霊につかれた女奴隷▽が△幾日間も▽彼らにまとわりついて叫び、伝道活動の邪魔をした。△占いの霊▽と訳される語は神話ではデルフィ(アテネの北西178kmにある聖域)の託宣神で、アポロンが化身した大蛇の名とされる。転じて、腹話術師の意味も持っている。この女性は腹話術を用いて神託を告げること、彼女の△主人たちに多くの利益を得させていた▽のである。△パウロは困りはてて、その霊にむかい「イエス・キリストの名によつて命じる。その女から出て行け」と言った。すると、その瞬間に霊が女から出て行つた▽。

伝道は悪魔に支配されている人々を神の王国へと奪還する霊の戦いである(26・18)。私たちが人々に伝道する時に、悪魔・悪霊が抵抗して、邪魔をするのは当然である。パゼット・ウィルクス師は『救霊の動力』でこう述べている。「わたしたちの取り扱わなければならないのは悪魔である。悪魔の存在を信ぜず、また悪魔について知らない者が救霊者になつたというためしはない」(14頁)。私たちは悪魔・悪霊について聖書的に、現実的に理解すべきである。彼らを見くびってはならないが、恐れて尻込みしてもいけない。私たちの主イエスは十字架の死とよみへの降下、復活、高挙によつて悪魔・悪霊を征服したお方である(マタイ16・18、エペソ1・20～22、4・8～10、コロサイ2・14～15、ヘブル2・14～15、1ペテロ3・22、黙示録1・18)。悪魔・悪霊に支配されている人々を主イエスの御名によつて解放しよう!

三、獄屋からの解放と獄吏一家の救い

女奴隷の主人たちは金儲けができなくなつたため、パウロとシラスを市の長官の前に引き出して訴えた。二人は何度も鞭打たれ、投獄された。二人の足は無理に広げられて木の足かせにはめられた。非常な痛みが続いたのに、パウロとシラスは真夜中ごろ真つ暗な獄中で△神に祈り、さんびを歌いつづけたが、囚人たちは耳をすまして聞きつていた▽。女奴隷の主人たちとは対照的に、パウロとシラスの心は何と平安に満ちていることか!

△ところが突然、大地震が起つて、獄の土台が揺れ動き、戸は全部たちまち開いて、みんなの者の鎖が解けてしまつた▽。獄吏は△囚人たちが逃げ出したものと思ひ、つるぎを抜いて自殺しかけた▽。囚人を逃がした場合、獄吏は命を要求される。灯火に照らされた獄吏の様子を見てパウロは大声で叫び、彼を止めた。△われわれは皆ひとり残らず、ここにいる▽。パウロとシラスの平安に満ちた霊性がこの場を支配していたのである。

獄吏はひれ伏して救いを求めた。二人は言つた、△主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます▽。二人は獄吏とその家族に福音を語り、その夜、洗礼を授けた。彼らは神を信じる者となつたことを共に心から喜んだ。

結論

神は今も人々の魂を揺り動かしておられる。覚醒(かくせい)した魂は「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」と叫んでいる。福音を明確に語り、主イエスの御名によつて人々の魂を解放しよう!

研究資料

(足立)

テキスト

16〜18 ピリピにおける回心者の中からルカは三人を選出。一人はルデヤ(16・14、15)。二人目が悪霊につかれた不幸な女奴隷。そして三人目が牢獄の看守。この個所は女奴隷の救いを記している。彼女は古い女であった。彼女の主人たちは彼女の病を食い物にして、金銭上の利益をせしめていた。この女の救いはパウロたちが折り場に行く途中で起こった。彼女が大声で幾日もパウロたちのことを触れ回り、困ったパウロが主の御名(参照3・6)によって命じると悪霊が彼女から出て行った。19〜24 女奴隷が解放されたことは、女の主人たちの反感を買った。彼らは金となる木を失って、パウロたちを逆恨みした。憤った彼らはパウロとシラスを市の行政長官たちの前に引きずり出し、彼らに対する告訴を提起。女の主人たちは二人をユダヤ人の路上生活者であり、町で騒ぎを起こし、ローマ人が採用実行してはならない風習を教えている、と主張。群衆の煽りも重なり、行政長官たちは二人をローマの秩序への反抗と決めつけ、正規の審議も行わず、彼らの上着を奪い鞭打ちを許可した。鞭打ちが繰り返され、二人は獄屋へ。看守は彼らに足かせをはめ、一番奥の監房に入れた。看守の務めは囚人の逃亡を防止、確認すること。25〜28 時は真夜中。パウロとシラスは神を褒め称える賛美をしていた。使徒行伝においてキリスト者は常に希望に満ちている。ペテロは自らの審理の前夜安らかに眠っていた(12・6)。パウロとシラスの賛美と元氣な姿はそれ自体神への証しで

あり、他の囚人たちは熱心に聴き入っていた。ピリピ周辺の地域ではしばしば地震や震動を経験したが、まさにこの時大きな地震が起こった。囚人たちの扉はおそらく横棒でロックされていたが、地震で飛び跳ね、数々の戸が開いた。すべての囚人の鎖が解けた。鎖は壁に繋(つな)がっていて、地震の力でもぎ取られたのかも知れない。看守は地震で目覚め、開いた数々の戸を発見した。彼は囚人たちが既に逃走したと思いこんで、自殺するため剣を引き抜いた。ローマ軍人の厳しい規律と責任から自分で命を絶とうとしたのである(参照12・19)。しかし看守に関わる囚人たちは逃亡していなかった。看守がまさに自害しようとしたとき、パウロはそれを見て叫んで自殺を阻止させた。奇跡的な解放であったにもかかわらずパウロとシラスは逃げなかった。彼らは更に重要な看守の回心という出来事に関わることになった。29〜34 看守はランブかたいまつを要求し、ささずパウロとシラスのもとに駆け込み、ひれ伏した。これには屈従の印象がある。確かにパウロは彼の命を救ったし、パウロの神は獄中での安全を保ったと言う印象を彼に与えたのであろう。わたしは救われるために、何をすべきでしょうか 看守の言った救いが何を意味するのかを断定はしがたい。しかし、パウロが救いの道を語ったと言う女奴隷の宣伝(16・17)を、この看守が聞いていた可能性は十分にある。けれども彼はパウロが語った救いの内容を明確には理解していなかっただろう。しかし今地震の奇跡やパウロたちの指示により囚人たちが逃げ出さなかった出来事によって、彼の心はパウロのメッセージを受け入れる備えが

できていた。とするなら彼の問いかけは、信仰に導かれる極自然な過程と理解可能。これに対してパウロたちの答えは明快。イエスを主と信頼せよ(受け入れよ)。そうすればあなたは救われる。あなたの家族も(参照2・38〜39、3・19〜26、4・12、8・12、35、10・43、13・38〜39、ローマ10・9)。イエスに対する信仰と彼を主と認め告白することが、根本的な救いである。宣教師ではなく主イエス・キリストだけが彼を救うことができる。また看守が福音を提示されたとき、おそらく獄中でのパウロとシラスの生き方にイエスを主とする姿が重なったと思われる。ここに福音提示が、人格を通しての真理の伝達である点も見逃せない。そしてパウロとシラスは救いが看守の家族全体に及ぶことを示唆している。個人を救う神は、家族も救う(11・14、16・15、18・8、参照1コリント1・11、16)。救いの基礎(31節)が置かれた後、パウロとシラスは更に詳細に 彼とその家族一同に、神の言を語って聞かせた(参照13・5、44)。福音の詳しい説き明かしと伝達が成されたのだろう。そして宣教師たちは傷ついた肉体を看守に洗ってもらい、看守の家の者たちは霊的にイエスの血によって洗われた。結果彼らはバプテスマに与った。パウロとシラスは看守の親切を受け入れ、看守とその家族は神の恵みの受取人となった。彼らはもはや囚人と看守の関係ではなく、キリストにある神の家族となった。

参考図書 F・F・ブルース『使徒行伝』(聖書図書刊行会) Kistemaker, S. J., Acts (Baker), Larkin, W. J., Jr., Acts (IVP), Polhill, J. B., Acts (Broadman) .

聖書 使徒16・16〜34
タイトル 牢獄にて（今、信じます）
暗唱聖句 主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。 使徒16・31
目 標 主イエスを信じるなら、家族も救われるという約束をつかむ。

導入

（光田）

皆さんはいつ頃から、教会学校にきていますか？生まれる前から来ている人も、今日初めて来た人もいますね。では、イエス様を心にお迎えするためにどれくらい時間がかかるでしょうか。今日のお話は、たった一日で家族全員がイエス様を信じて救われたお話です。

牢屋へ

パウロさんとシラスさんは「マケドニアに来て私達を救ってください」という幻を見て、ピリピという町に出かけて行きました。その町には占いを商売にして大変多くのお金をもうけている人たちがいました。占いは神様が禁止しておられることです。そこで、パウロはイエス様の御名によって、その女奴隷から占いの霊を追い出しました。するとその女奴隷の主人たちはお金もうけができなくなったことに腹を立て、パウロとシラスを役人のところに連れて行って「この人たちはローマで採用も実行もしない風習を宣伝して町を混乱させています」と訴えました。多くの人も同じように言ったため、パウロとシラスはどうとうムチで何回も打たれた上、足かせをしつかりはめられて、

牢屋の奥に閉じ込められてしまいました。

牢屋の中で

牢屋には獄吏といって、牢屋番をする人が置かれ、パウロとシラスをしつかり見張っておくように命令を受けていました。傷ついて血を流していたパウロとシラスは、その夜をどのように過ごしていたのでしょうか。真夜中ごろ、暗くじじめじめた牢屋の中では、うめいたり怒鳴ったりする声が聞こえたのでしょうか。いいえ、お祈りの声が聞こえてきます。続いて神様を賛美する力強い声が響いてきます。そうです。それはパウロとシラスの声です。体はズキズキ痛み、足かせで不自由なままでしたが、聖霊の力に満たされていました。一緒に牢屋にいた人たちまでも、息を潜めて静かにその声に聞き入っています。どうもいつもの牢屋の様子とは違っています。

そのとき突然大きな地震が起こり、牢屋の土台が揺れ始め、あつという間に閉まっていた扉が全部開いてしまいました。おまけに、囚人たちの鎖までみんなはずれてしまいました。びっくりして目を覚ました獄吏は、「しまった、囚人がみんな逃げてしまった。どんなに叱られるだろうか」と思って、真っ青になってしまいました。そして死ぬしかない剣を手持ったとき、パウロが大声を上げて「自害してはいけない、みんなここにいろ」と叫びました。その声を聞いた獄吏はあかりを取ってきて、震えながらパウロとシラスの前にひれ伏してしまいました。そして「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」と尋ねました。パウロは「イエス様を信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」と答えました。

と答えました。

真夜中だったにもかかわらず、獄吏は二人を家につれて帰り、傷の手当をしました。そして獄吏はパウロから聞いたとおりにイエス様を心から信じて、家族と一緒にバプテスマを受けました。この獄吏の一家は一日だけで、全員がクリスチャンになったのです。すばらしいですね。

まとめ

私達を救うため、イエス様は罪の身代わりとして十字架にかかってくださいました。だから、私たちは、自分の罪を悔い改めて、イエス様を信じさえすれば、誰でもすぐに救われます。

例話

山田晴枝先生は、昔、神戸で洋服を作る仕事をしていた。ある日お友だちに「いいところに連れて行ってあげると誘われて、映画館で待ち合わせをしました。きつと映画館を見るのだと思っていると、お友だちは映画館には入らずに、隣の伝道館に連れて行ってしまったのです。そこで初めて聖書のお話を聞きました。そこで「あなたには罪がありません」と聞かされたので、本当に腹を立てて家に帰りました。ところがその夜、布団の中でよく考えると、自分の心にも罪があることが分かってきました。そこで起き出して、神様にごめんなさいとお詫びをして、イエス様をその日に信じる事ができました。

♪どうしてかわかるかな♪
（ふくいん子どもさんびか4）



聖書 使徒17・16〜34 テーマ アテネ宣教

序論

(金井)

1549年、最初に来日した宣教師フランシスコ・ザビエルは、宇宙の創造主という概念が日本人に皆無であることに驚いた(ピーター・ミルワード『ザビエルの見た日本』講談社学術文庫、87頁)。この異教社会で創造主なる神をどのように伝えたいか、パウロのアテネ宣教から学びたい。

一、偶像崇拜者と哲学者

パウロは第2回宣教旅行においてマケドニアで宣教したが、ユダヤ人から迫害を受けたため、そこを逃れ、ギリシアの町アテネに來た。彼はここでデモテとシラスが来るのを待っていたが、その間に八市内に偶像がおびただしくあるのを見て、心に憤りを感じた。ギリシアでは紀元前8世紀から相次いで神殿が建てられており、偶像崇拜が盛んであった。さらに、ローマの地中海世界統一によって東西の交流が盛んになり、小アジアやオリエントの神々がギリシアに輸入されていた。

パウロは、八会堂ではユダヤ人や信心深い人たちと論じ、広場では毎日そこで出会う人々を相手に論じた。アテネは紀元前5世紀に最も繁栄して、高度な文化を誇った。パウロが訪れた紀元1世紀中頃には町は斜陽化していたが、アテネ人や在留外国人の知的好奇心はなお旺盛であった。

パウロは町の広場で「哲学者数人」と議論した。△エピクロス派△は政治や社会から身を避け、

迷信的な恐怖から逃れて、健康な身体と平静心を追求する自己充足的・個人主義的な思想である。エピクロス(前342年〜前271年)は物質の根源を粒子(アトム)とみなす原子論を支持しており、機械論的・唯物論的な世界観を持っていた。

△ストア派△は宇宙全体を支配する原理(ロゴス)と小宇宙である人間との一致を目標とし、情念に動かされない理性的・禁欲的な生き方を求める思想である。ストア派は神を人格者ではなく世界靈魂とみなす汎神論的な世界観を持ち、この頃にはポリス(都市国家)の枠組みを超えた世界市民思想(コスモポリタニズム)を持っていた。

パウロは彼らに△イエスと復活とを、宣べ伝えていた。彼らは興味を持ち、パウロを△アレオパゴス△の評議所に連れて行った。これは軍神「アレースの丘」の意で、法廷の場となっていた。

二、創造主の啓示と救いのみわざ

パウロは△評議所のまん中に立つて説教した。彼はまず、△アテネの人たち△は△すこぶる宗教心に富んでいる△と肯定的に評価した。次に、パウロは△「知られない神に」と刻まれた祭壇△の話を持ち出し、△あなたがたが知らずに拝んでいるものを、いま知らせてあげよう△と言って、真の神について教え始めた。

①△この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない△。これは出エジプト記20章11節と列王紀上8章27節からの引用である。真の神は宇宙の創造主であり、被造物とは絶対的

に区別される超越者・永遠無限のお方である。神は聖書によって特別な啓示を与えておられる。

②△神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、また、ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。神はユダヤ人のみならず、すべての人間にとって命の供給者であり、歴史の支配者である。神は人間に神を求める思いを与え、神を見いだす道を備えてくださった。キリスト教神学では自然、良心、歴史における神の啓示を「一般啓示」という。

③△神は、義をもつてこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである。神の御子イエスの受肉・死・復活は神の決定的な啓示であり、全人類のための完全な救いのみわざである。それゆえ神は、△今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならぬことを命じておられる△のである。

結論

私たちキリスト者は偶像崇拜を嫌うあまり日本人の宗教心まで否定して人々の心を閉ざし、壁を作ってはいないだろうか。日本人の宗教心を尊重しつつ、日本人が求めてきた救いが創造主なる神とイエス・キリストにこそあるのだと伝えよう。今こそ日本人が悔い改めて、救われる時である。

研究資料

(足立)

パウロがアテネに短く滞在したことは、使徒行伝全体の中で異色の光を放っている。そもそも宣教のために立ち寄ったのではないが、結果としてアレオパゴスの評議所の前で説教を試みた(22、31)。アテネは当時世界の知性的中心地で、ギリシア哲学が支配する場であった。パウロは異教社会の知的階級者に福音を伝えるため、思い立ったように行動を起こした。

テキスト

16、21 アテネはその荘厳な芸術と建築の故に世界中に名を知られていた。しかしながらその芸術品は性質上ギリシアの様々な神々の偉業を表現していた。またたいの建築物は異教の神々を祭る宮であった。**心に憤りを感じた** 強力な唯一神信仰を持ち、刻んだ像を嫌うユダヤ人キリスト者パウロにとって、その光景は全く受容できなかったろう。彼は今までどおり伝道説教をした。安息日には会堂でテサロニケでのアプローチ同様(17、18、4) 聖書の根拠からキリストを論じた。しかし平日はアテネ人の生活の中心であるアゴラ(広場)で証しをした。ギリシア哲学のエピクロス派は徹底した物質主義者で、すべてはアトム(物質を構成する仮定上の最小要素)からなると信じていた。これを越える命はなかった。すなわち人間は死んで物質に帰るといことがすべて。一方ストア派は汎神論(神と世界は一体)に立ち、自然の摂理を認めていた。彼らは多神教者で、究極の支配原理はすべて自然の中に見いだされ、人間も

そこに含まれると信じていた。**おしゃべり**と訳される語(スベルモロゴス)は、直訳では「種をついばむ者」となり、次に転じて学問のくず拾い、つまらぬ人間の意味に使われた。パウロは**イエスと復活**(アナスタシス)を宣教したが、彼らはイエスとアナスタシスと言う二つの神々と理解したようである。そこで彼らはパウロをアレオパゴスに連れて行き、新しい教えを聞こうとした。

22、31 アレオパゴスの説教は以下のような五つの対に分けることが可能(A、B、C、B、A)。22、23節は、異教礼拝の無知という主要テーマを導入している。24、25節は、礼拝の真の対象は創造者なる神で、宮を拝む偶像崇拜は愚かなことを示す。26、27節は、創造者と人間の真の関係を扱い、これがメッセージの中心部分となる。28、29節は、神と人との関係の議論に移行し、偶像礼拝を捨てる根本を提示している。最後の30、31節は、最初のテーマに戻る。無知の時代は終わり、来るべきさばきとキリストの復活という光の中で悔い改めが求められている、と。

教養あるギリシア人に、パウロはそのニーズを汲んだ説教をした。まずアテネ人が**宗教心に富んでおられる**と評価した(22)。この言葉(ディンダイモネステロス)は、「迷信深い」と言う意味にもとれるが、聴衆との接点を求めて好意的に語ったのだろう。**『知られない神に』と刻まれた祭壇**パウロは、アテネ人たちが自ら知らないと言告白し拝む神を、知らせようと切り出す(23)。パウロが信じる神は、全能の創造者。人の手による宮には住まない(24)。人に仕えられる必要もなく、すべての人に命と息と万物を与える(25)。引用聖句こそ出てこないが、彼の考えは旧約聖書に基づ

くもの(参照イザヤ42:5、詩篇50:7、15)。26、27節は、摂理の神を主張し、この演説の中心部分となる。ここには二つの強調が含まれる。①神の人類に対する摂理と②人間の神に対する責任。神は人間が地に住むため創造した(26)。と同時に人間が神を探し求めるため(27)に、神は人を創造されたのである。ここでも支配的な概念は創造主なる神。28、29節は、神が近くにおられることを取り上げ(28)、偶像崇拜の批判の基礎を提示(29)。**『われども、確かにその子孫である』**パウロはギリシアの詩人の言葉を取り上げながら、神の子孫である人間が真の神と、金・銀・石などに人間が工夫と技巧を加えて作り上げた物とを、同列に置くような愚かな行動をしてはならない、と批判している。この背後には人間が神のかたちに似せて造られたという旧約の前提がある(創世記1:26、27)。30、31節でパウロは、彼が語り始めた無知の主題に立ち返り、アテネ人に適用する。すなわち彼らには無知故の罪がある。唯一のまことの神を知らず、礼拝しない故に、彼らの敬虔の行為はすべて無駄である。しかし神はその忍耐故にその無知を見逃してくださった(参照ローマ3:25)。今や神の忍耐の時は終わり、愚かな礼拝を完全に捨て去り神に立ち返る悔い改めの時が来ている(30)。神のさばきは復活の主により成され、今や悔い改めへの招きがキリストにより世界中に及んでいる(31)。

32、34 アテネ人の反応は、死人の復活に関して極めて否定的。しかし少数の者ではあるが、キリストの福音を受容する者も起こされた。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』

(いのちのことば社)、F.F.ブルース「使徒行伝」(聖書図書刊行会)、Polhill, J.B., Acts (Broadman)

聖書 使徒17・16〜34

タイトル アテネ宣教

(神様は目に見えない)

暗唱聖句

われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。

使徒17・28

目標 偶像に満ちたアテネでの宣教に学ぶ。

導入

(光田)

太陽や月、虫や花、大きなものでも小さなものでも、人間が作ることでできない素晴らしいものがこの世界にはいっぱいあります。そして、空気や心のように、見えないけれど「ある」ものもあります。神様も私たちの目では見ることができません。では、本当の神様をどうしたら知ることができるでしょうか。

偶像の町で

パウロはアテネで、遅れてくるシラスとテモテを待っている間に、アテネの町をゆつくり歩いてみました。するとこの町には、たくさんの金や銀や石で作られた神様の像があちこちにあつて、人々に拝まれていたのです。パウロは心の中に怒りがこみ上げてきました。どうしてかと言うと、目に見えない形のない神様を、何か目に見える物にすり替えて拝んでいたからです。そこでパウロはすぐに、イエス様のことを話すチャンスを見つけ始めました。ユダヤ人の会堂では信仰深い人たちに向かって語り、広場では毎日出会う人々とできるだけたくさんの人と語り合いました。アテネは哲

学者が大勢いる町なので、その人たちとも議論をしました。

多くの人がイエス様のことを聞くのは初めてでした。珍しい話を聞くのを楽しみにしている人が大勢いたので、面白そうだからパウロの話をものつとよく聞きたいと言いました。そして、アレオパゴスという評議所に人々を集めて、パウロに初めから詳しく話をしてほしいと頼みました。

評議所で

パウロは集まってきた人々にこの町の人たちがとても信仰に熱心であるとほめてから話を始めました。そして、パウロが見てきた町中のいろいろな拝むものの中に「知られない神に」というものがあつたことを話しました。そこで、知らない神様を拝むのではなく、本当の神様のことを教えてあげましょうと言いました。そこでパウロは、「世界と全てのものを造られた方が神様です。だから神様は、人間の手で作った建物の中には住んだりされず、人に仕えられたりする必要もありません。それどころか、人に命と息と全てのものを与えてくださっているのです。そして今ある国も、その歴史も、国や民族も、まず一人の人から始まって、全ての民族を造られ世界中に住ませられているのです。そして、もし人間が本気で神様を探そうとすれば、誰でも分かるようにしてくださっています。神様はどこか遠くにいらっしゃるのではありません。反対に、私たちは神様の中に、生きています。ですから、偶像の神を拝むことはやめましょう」と勧めました。そして、イエス様が私たちの罪の身代わりに十字架で死なれ、よみがえられた救い主であると伝えました。

ところが、死人のよみがえりの事を聞いたとたんに、多くの人は馬鹿馬鹿しい話だと言つてあざ笑ひ、その話はまた聞くことにすると言つて去っていきました。けれども、その中のわずかな人はパウロの語ることをよく聞いて、イエス様をそのまま信じたのです。

まとめ

人間が手で作るものは神様ではありません。神様は目には見えない方です。しかし、見えない神様がたつた1度だけ、目に見える姿でこの世界に來られました。それがクリスマスです。イエス様は、良いわざを行われ、天国のことを話してくださいました。最後には十字架にかかつて、私たちの罪の身代わりに死んでくださいました。そして死からよみがえられ、天に歸られました。そして、イエス様を信じる人に永遠の命をくださいます。イエス様は私たちのために命を捨ててくださいました。目に見えなくても、私たちはイエス様の約束を信じましょう。神様がくださった愛の手紙である聖書を読み、お祈りをしましょう。神様は私たちの祈りを聞いてくださり、答えてくださいます。そして、神様が生きておられることが毎日分かっています。

今朝何を食べましたか。おいしいトーストですか。パンを作るためには小麦粉が必要です。麦を小麦粉に挽く人がいます。麦ができるためには、太陽と雨が必要です。種を備え、太陽や雨を降らせてくださるのは神様です。神様はいつも生活の周りにもおられます。♪すばらしい神様♪ (フレイズワールド23)



聖書 使徒18・1～11 テーマ コリント宣教

序論

(金井)

私たちが生きる現代日本社会には異教の問題に加えて、世俗化・道徳的退廃という問題がある。幾重にも連なる障壁を破る神のみ業を学びたい。

一、宣教の協力者

パウロのアテネ宣教は成功したとは言い難いものであった。重い心を引きずりつつ次に彼が向かったのは△コリント▽である。コリントはギリシア本土とペロポネソス半島を結ぶ地峡に位置し、エーゲ海とアドリア海を結ぶ東西貿易の中継地として栄えた国際商業都市である。約2万人を収容する大劇場や市場があり、陶器の製造が盛んであった。町の西南にそびえるアクロ・コリント山(標高575m)の頂上には女神アフロデイトの神殿があり、神殿売春婦である巫女がおよそ千人もいた。コリントは道徳的に退廃した町だったのである。

この町でパウロはアクラとプリスキラ夫婦に出会った。アクラは小アジア北部・ポント州出身のユダヤ人である。この夫婦はローマに住んでいたが、クラウデオ帝のユダヤ人追放令(49年頃)によってローマを出され、コリントに移住していた。彼らはパウロと同業者Ⅱテントメーカーであり、熱心な信徒伝道者だった。パウロは彼らの△家に住み込んで、一緒に仕事をし▽ながら伝道した。△天幕▽はパウロの出身地キリキヤ地方で製造された山羊の毛で織った布で作られた。天幕作り

職人として働きながら伝道したことをパウロは誇りとしていた(Ⅰコリント9・15)。

これ以降、この夫婦はパウロにとつて、重要な宣教の協力者となった(18・18、26、ロマ16・3、5、Ⅰコリント16・19、Ⅱテモテ4・19)。さらに、△シラスとテモテ▽も駆けつけたので、△パウロは御言を伝えることに専念▽することができた。△マケドニア▽の教会が物心両面でパウロを支援したのである(ピリピ4・15)。

宣教には多くの苦勞が伴うが、神は必ず私たちにも協力者を備えて、必要を満たしてくださる。

二、宣教の実

パウロはコリントでも、まず△ユダヤ人▽に△イエスがキリストであること▽を証した。彼らがパウロの宣教に△反抗してのしり続けたので、パウロは自分の上着を振りはらつて▽、彼らの滅亡について自分が責任を負わないことを宣言した。この行為は、パウロの宣教を拒絶したユダヤ人が神によって拒絶されることを表している。

パウロはますます異邦人宣教に力を入れるようになった。パウロはまずユダヤ教会の周辺にいる△神を敬う▽異邦人に伝道した。彼らは旧約聖書が証しする創造主を信じていたが、割礼や食物、祭日、清めなどの律法を守り行うことができないために、ユダヤ教徒に改宗することができずにいた人たちである。ところが、偉大な律法学者であり、パリサイ派の教師であったパウロが、今や律法の行いによってではなく、イエスを主キリストと信じる信仰によって異邦人も救われ、神の民に

加わることができる」と説いたため、彼らは非常に驚き、この福音を喜んで受け入れたのである。

こうしてユダヤ教会の隣りに住む△テオ・ユスト▽や△会堂司クリスボ▽を始め、△多くのコリント人も、パウロの話を聞いて信じ、ぞくぞくとバプテスマを受けた▽。神は豊かな収穫をもつてパウロの労苦に報いてくださったのである。

三、宣教の保護

ユダヤ教会の中心や周辺にいた人々がパウロの側に行ってしまったので、ユダヤ人たちはパウロを憎んだだろう。彼らのパウロに対する迫害が予想された。△すると、ある夜、幻のうちに主がパウロに言われた、「恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。あなたには、わたしがついていく。だれもあなたを襲つて、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる」▽。神はすべてをご存知であり、適切な導きと励ましをパウロに与えてくださった。神は救われるべき人々を備えておられる。そして、神はその人々に福音を語り伝える人を求めておられるのである。

結論

△パウロは一年六か月間ここに腰をすえて、神の言を彼らの間に教えつづけた▽。それは50年秋頃から52年3月までだろう。その後もパウロはコリント教会に手紙を書いて指導を続けた。分裂、不品行、偶像崇拜などの問題を処理するためである。宣教には多くの課題があるが、神が私たちの味方なのだから、恐れず福音を語り続けよう。

研究資料

(足立)

パウロの時代コリントは、ギリシャの第一級の国際都市でかなり大きかった。またギリシャ本土とペロポネソス半島を結ぶ地峡に位置していた故、商業都市として主要な中心地であった。陸路はギリシャの南北交通の要所。東はケンクレヤ港を擁してエーゲ海に開かれ、西はレカイオン港によりアドリア海に通じていたため、東西貿易の中継地として海運の拠点となっていた。コリントの町は一度、前146年にローマによって破壊された。しかし前44年にローマの植民都市として再建され、パウロの時代に至るまで地勢上の利点を背景に経済的繁栄を誇った。と同時に男女間の乱れでも有名であった。パウロは第二回伝道旅行時コリントを訪れ(18・1)、一年半滞在して(18・11)宣教を行った。アクラとプリスキラという良い協力者を得、多くのコリント人が信仰に入り(18・8)、コリント教会が形成された。

テキスト

1〜2 パウロがコリントに着いたとき、アクラとプリスキラという名のユダヤ人夫婦に出会った。この二人はパウロの書簡に言及されている(ローマ16・3、Iコリント16・19、IIテモテ4・19)。パウロとルカは常に彼らのことを一緒に取り上げ、決して切り離さない。彼らは皇帝クラウデオによるユダヤ人退去命令により、ローマからコリントに来ていた。

3 パウロは書簡で自らをサポートする仕事に言及(Iコリント4・12、Iテサロニケ2・9、参

照IIコリント11・7)。彼の仕事は **天幕作り** で、アクラとプリスキラとも同業で、この点でも心開ける関係を築けたのだろう。この仕事は一般的に言えば皮細工人のことで、衣服やカーテンなどに用いられる、山羊の毛織物の製造業であった。パウロは伝道旅行の期間中、いつもこの方法で生活の糧を得ていた(参照使徒20・34)。これは福音の障害を避けるために、敢えてコリント人から援助を受けないと言うパウロの宣教姿勢の表れであった(参照Iコリント9章、特に12節)。

4 パウロは安息日には会堂で礼拝した(比較13・14、14・1)。説教者として立つとき、彼はユダヤ人にも神を畏れる異邦人にも福音を受け入れ、救い主としてイエスを受け入れるよう説得に努めた(参照17・2〜4)。

5〜6 シラスとテモテはマケドニヤから、パウロの伝道のために援助金を持参した。IIコリント11・8以下にはコリント宣教に努めるパウロに諸教会から援助があったことへの言及があり、またピリピ4・15以下にはパウロが継続して宣教するために惜しめない援助があったことが記されている。こうしてパウロは安息日だけでなく、絶え間なく自由に宣教できた。しかしながら必然の結果と思われるが、ユダヤ人の反対が起こった。パウロは会堂から離れ、異邦人に向かった。このパターンはピシデヤのアンテオケの会堂と同様であった(13・44〜47)。そしてこのことは使徒行伝の終わりまで何回も繰り返されることになる(28・23〜28、参照19・8〜9)。**あなたがたの血は…わたしには責任がない**(参照エゼキエル33・1〜7)。

7〜8 パウロは会堂を去って、テデオ・ユスト

という名の神を畏れる異邦人の家に証言の場を移した。おそらく彼は4節で言及された人々の一人であろう。会堂司クリスボとその全家族もイエス・キリストの弟子となった。クリスボはユダヤ社会では目立った存在。彼の回心はコリント教会の成長に決定的な影響を与えただろう。

9〜10 主を信じる者たちが起こされても、パウロの心に恐れがあった。それはユダヤ人の反抗と町それ自身が持つ性質だろう。しかし深い落ち込みにあるとき、主が幻によって彼に語りかけた(参照23・11、27・23〜24)。そのメッセージは旧約にも見受けられ(出エジプト3・12、申命記31・6、ヨシュア1・5、9、イザヤ41・10、43・5、エレミヤ1・8)、内容は **恐れるな。語らう。黙っているな**。この語りかけの背後には三つの約束が伴った。主が彼と共にいる(参照マタイ28・19〜20)。誰も彼に危害を加えない(参照18・12〜17、詩篇23・4、イザヤ41・10)。この町に主は多くの民を持つておられる(参照列王上19・18、ホセア2・23)。民(ラオス)という言葉は、一貫して神の民として使われている。異教社会のただ中にあっても、主は永遠のいのちに定められた者たちを知っておられる(13・48、参照ヨハネ10・16)。

11 パウロは主の幻に応答した。彼は新しい確信が与えられ、18ヶ月コリントに滞在し、宣教のわざを続けた。 **神の言**(参照4・31、15・35)。

参考図書 F・F・ブルース『使徒行伝』(聖書図書刊行会)、Kistemaker, S. J., Acts (Baker), Polhill, J. B., Acts (Broadman), Williams, D. J., Acts (Hendrickson)。

聖書 使徒18・1～11
 タイトル コリント宣教(イエス様が味方)
 暗唱聖句 あなたには、わたしが
 ついていて。 使徒18・10
 目 標 困難なコリント宣教でも神様の
 励ましが力となったことを知る。

導入

(光田)

皆さんには困ったときやがっかりしているときに、助けてくれたり、励ましてくれるお友だちがいるでしょうか。今日は、パウロさんが弱っているときにどんな助けがあったのかを学びます。

失意の中で

パウロの伝道旅行はどんどん進んで行きます。アテネの町で信じる人たちが少なかつたので、元気なパウロもさすがに少しばかりがっかりしていました。イエス様を信じる人が少ないし、妨害をする人が大勢いるのに、これから先の旅でしっかり働けるだろうか、と不安になっていたのです。ちょうどそのとき、天幕造りを仕事にしているまことの神様を信じる夫婦に出会いました。この夫婦は最近イタリヤから出てきた人たちでした。ご主人の名前はアクラ、奥さんはプリスキラと言う名前です。パウロも同じ天幕造りの仕事をして生活をしていたので、彼らの家に住み込んで一緒に働き始めました。パウロは安息日ごとに会堂で、ユダヤ人やギリシヤ人たちがイエス様のことを信じるように話し続けました。1週間のうち6日間是天幕造りで働き、残りの1日は伝道に励んでいたのです、休み暇もありませんでした。

そこに、シラスとテモテがマケドニアから来てくれたので、パウロは仕事をすっかり止めてみ言葉を伝える働きだけに励むことができるようになりました。しかし、パウロがどんなに力強くイエス様がまことの救い主であるかを話しても、ユダヤ人は信じないばかりか、ののしったり、反対し続けるのです。そこでパウロはとうとう上着を振り払って「私にはもう責任はない。これから私は、ユダヤ人以外の人たちの伝道に行く」と言つてそこを去って行きました。

神様の励まし

やっと伝道に励むことができるようになった矢先に、また移動です。次にパウロが出かけたのは、神を敬うテオ・ユストという人の家です。この人の家は会堂の隣にありました。会堂司のクリスポという人は家族全員がイエス様を信じました。ここでは多くのコリント人もパウロの話を聞いて信じ、人々は続々とバプテスマを受けました。パウロはどんなにうれしかったことでしょう。

そんなある夜、神様がパウロに幻の中でお話になりました。「恐れてはいけません。語り続けなさい。黙っていてはいけません。あなたには、わたしがついていきます」と。パウロの味方は神様ご自身です。しかも神様は、誰もパウロを危険な目に合わせることはないばかりか、コリントの町には神様の民が大勢いるのだから、がっかりしたり弱ったりしてはいけなさと励ましてくださったのです。アクラとプリスキラ、シラスとテモテ、テオ・ユスト、クリスポとその家族、バプテスマを受けた大勢の人たちと、パウロの力となり、励まし支えてくれる多くの人たちが加えられてきました。しか

し、これらの人々以上にパウロを奮い立たせたのは、神様が直接語りかけてお言葉をくださったことです。勇気百倍。もう弱ったり嘆いたり、恐れたりはしていません。

まとめ

私たちも時々元気がなくなることがあります。病気になるるとき、けんかをしたとき。失敗したとき、いじめられたとき。でも今日のパウロさんのことを考えましょう。神様は私たちの周りにも、励ましや勇気、元気をくれる人を置いてくださっています。それはお友だち、お父さんお母さん、教会の人たちなどです。

これらの人々以上に、神様が私たちを励まして力づけてくださいます。弱虫の私、がっかりしている私たちを神様はよく存じます。聖書の中に、私たちを励まし、勇気を与え、慰めてくれるみ言葉をたくさん用意してくださっています。み言葉を読んで、神様の声に耳を傾け、心に留めましょう。神様は必ず必要な助けをくださり、勇気を与えてくださるはずですよ。

朝起きたとき、夜寝る前、食事のときなどに、み言葉を読む習慣がありますか。短い時間でもみ言葉を読むなら、神様が力をくださいます。み言葉のカードをいつも持って歩くのも良い方法です。何が起ころうとも、十字架で死と悪魔に勝利されたイエス様を信じているなら大丈夫です。

♪ いっしょにうたおう♪

(プレイスワールド30)



聖書 使徒19・11～22 テーマ エペソ宣教

序論

(金井)

使徒行伝の学びは今回が最終回である。今日はパウロが第3回宣教旅行でエペソに滞在した時の記録を中心として、霊的戦いについて学ぼう。

一、宣教の戦略的拠点

パウロは第2回宣教旅行で、小アジア内陸部の諸教会を訪問した後、エペソ方面に向かう予定であった。しかし、その進路を聖霊に禁じられたので(16・6～8)、彼はトロアスからマケドニアに渡った。そして、パウロはピリピ、テサロニケ、アテネ、コリントなど、マケドニアとギリシャの主要都市で宣教した後、52年3月にエーゲ海を渡ってエペソに行った(18・19)。

エペソは東西交易の要衝として栄えた港湾都市である。この時代には小アジア西岸地域・アジア州の都であり、人口25万人ほどの都会であった。①地方の中心都市で開拓伝道を行って宣教の拠点となる教会(群れ)を形成し、②その教会で信徒教育や伝道者養成などの弟子訓練を行って、③宣教チームをその地方の各地域に派遣する。この宣教戦略の拠点としてエペソは好適地であった。

だが、この時パウロは4月初旬の過越祭までにエルサレムに行きたかったので、すぐにエペソを去った。そして翌年秋に彼は再びエペソを訪れ、3年間ここで宣教活動を展開したのである。

二、主イエスの御名の権威

パウロが不在の間にこの地で伝道者アポロが活動した。彼は人々にイエスを伝えたが、ヨハネの洗礼しか知らなかった。彼と同じグループの弟子たち(19・1)は聖霊を知らず、「ヨハネの名による」洗礼を受けた時には聖霊を受けていなかった。そこで、パウロは彼らに「主イエスの名による」洗礼を授けた。そして、パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らに降った。聖霊は真のキリスト者の証印である(エペソ1・13)。

パウロは当初、ユダヤ教の会堂で宣教したが、ユダヤ人の反対を受けたので、「ツラノの講堂」に移って宣教を続けた。彼の弟子たちの活躍もあって、2年間でアジア州全体に主の言葉が広まった(コロサイ1・7、2・1、4・13)。

△神は、パウロの手によって、異常な力あるわざを次々になされた▽。人々の病気はいやされ、悪霊は追放された。△そこで、ユダヤ人のまじない師で、遍歴している者たちが、悪霊につかれていた者者にむかつて、主イエスの名をとえ、「パウロの宣べ伝えているイエスによって命じる。出て行け」と、ために言ってみた。ユダヤの祭司長スケワという者の七人のむすこたちも、そんなことをしていた▽。エペソには祈禱師や占い師、魔術師が多数いた。ユダヤ人の呪術師は神や人の名を唱えてまじないを行っていた。彼らはパウロが唱える△主イエスの名▽の力に驚き、彼を真似た。△すると悪霊がこれに対して言った、「イエスなら自分は知っている。パウロもわかっている。だが、おまえたちは、いったい何者だ」。そして、悪

霊につかれていた人が、彼らに飛びかかり、みんなを押えつけて負かしたので、彼らは傷を負ったまま裸になって、その家を逃げ出した▽。これによってさらに△主イエスの名があらがめられた▽。

三、霊的戦いの継続

△また信者になった者が大ぜいきて、自分の行為を打ちあげて告白した。それから、魔術を行っていた多くの者が、魔術の本を持ち出してきては、みんなの前で焼き捨てた。その値段を総計したところ、銀五万にも上ることがわかった▽。銀貨1枚は1日分の労賃であるから、彼らが持っていた魔術の本は相当な量である。悪い霊的習慣を断つことによって、△主の言はますます盛んにひろまり、また力を増し加えていった▽。

この頃、△パウロは御霊に感じて▽、エルサレムに行き、さらに△ローマ▽に行く決心をした。エペソにはアルテミスの大神殿があり、ここは地中海世界に広がる母性神信仰の中心地であった。帝都ローマは皇帝崇拜の本拠地である。パウロは異教の地で、聖霊の導きと力によって勇敢に霊的戦いを続けたのである。この後パウロはエルサレムで捕縛され、カイザリヤとローマで監禁された。釈放後、彼はマケドニア、小アジア、クレテ等で宣教を続けて、64年にローマで殉教した。

結論

今も魔術は人々に影響を与えており、偶像崇拜も根強い。私たちはみ言葉と祈りによって武装し(エペソ6・10～20)、救霊戦を続けていこう！

研究資料

(足立)

パウロによる偽りのない奇跡のみわざによって、二つの出来事が引き起こされた。第一は、イエスの御名を使用したユダヤ人魔術師の企てが不成功に終わったこと(19・13〜16)。第二は、魔術や悪霊に対する福音の大勝利が記されている(19・17〜20)。

テキスト

11・12 パウロのエペソ伝道における注目すべきことは、神が彼を通して成された奇跡を含む点にある。ルカは **異常な力あるわざ** と表現している。その実例として、パウロが使ったタオルや前掛けを人々が取って持つていき、それを病人に当てると病が癒されたと言う出来事を記している。使徒の体に触れた布地でさえ癒しの効果があると人々は信じていた。

このような出来事は現代人にとって奇妙に思えるかも知れない。しかしながら他の新約の箇所でも紹介されている(マルコ5・27・34、6・56、使徒5・15)。ここでの強調点は、神の力がパウロの奇跡において明示され、究極的にはエペソ人の魔術や迷信に打ち勝つよう導いたと言えよう(参照19・17〜20)。

13 パウロの奇跡は純粹に彼の助けを求める人たちと同様に、間違った集団にも衝撃を与えた。他の悪魔払いの祈禱師たちが主の御名を用い始めた。魔術を行う者はどこにでもいた(13・6、8等)。古代ローマ社会でユダヤ人魔術師は彼らの宗教の伝統ゆえに高い評価を受けていた。それは彼らが特別に有力な呪文を駆使できると思われるていたか

らである。

14 ユダヤの祭司長スケウという者の七人のむすこたち 彼らは、悪魔払いを売り物とするユダヤ人祈禱師たちの仲間と推察される。「ユダヤの祭司長」とは、スケウがブラカードに並べ立てた自稱の称号であったと考えられる。

15・16 これらの悪魔払いの祈禱師が誰であろうと、イエスの御名による祈願は失敗に終わった。パウロではなく標的とされた悪霊が、祈禱師たちの破滅を招いたことは興味深い。イエスなら自分は知っている。パウロもわかっている。だが、おまえたちは、いったい何者だ。悪霊はイエスを認め、パウロを通して働いたイエスの力さえ認識している。しかしながら悪霊はこれら7人による追い出しには何ら服従しようとはしなかった。7人は悪霊に対して如何なる力も持っていなかった。そして悪霊にとりつかれた人が彼らに激しい力で逆襲し、徹底的に打ちのめし、彼らを家から裸のまま走り出させた。このことからキリスト信仰は魔術と何ら関わりないことがわかる。イエスの御名は魔術的な顕現ではない。イエスを信仰告白し、イエスと一つとされた者(パウロのように)を通してのみイエスの御霊は働かれる。また悪霊がイエスを知っている、それは信仰告白したのではない(参照ヤコブ2・19、マルコ3・11、1コリント12・3)。

17・18 悪霊がイエスを認識し、権威なき魔術師たちに逆襲したことは、エペソ人たちに大きな影響を与えた。明らかにイエスの御名には力があり、もてあそぶべきものではなかった。聖なる畏れが彼らを捉え、彼らは主イエスの御名を崇めた。こ

の人たちはキリスト者でありつつも密かに魔術に関わっていた。その隠れた罪を明確に告白し、信仰が覚醒された。エペソは魔術に関して中心地として有名であった。偶像礼拝は徹底して明らかにされ、告白し悔い改める必要がある。

19 魔術を捨てたエペソ人たちには個人的な犠牲が伴った。魔術の諸々の書物はパピルスの収集のようなものであったに違いない。それらは発掘されて、今日パリ、ベルリン、ローマ、ロンドンの各博物館に陳列されている。古代の書物はすべて高価であったが、魔術の巻物の収集はかなりの高値を呼んだ。ルカは、エペソで焼却された物の価値を銀5万枚にもものぼると見積もっている。

20 この節はパウロによるエペソ伝道の要約を提示している(参照6・7、12・24)。結論として、主のことばの前進と成長であった。人々がパウロの説教に対して信仰による応答を成し、ますますみ言葉が実を結んだ。エペソのキリスト者たちが個人的な犠牲を払っても、魔術の書物を公に焼却したことこそ生きた証であった。

21・22 エペソ伝道の大きな成果を見届けたパウロは、聖霊の更なる導きを覚えて **マケドニア、アカヤをとって、エルサレムへ行く決心をした**。ここで大切なのは、彼が **ローマ** への展望を口に出していることにある。この箇所の最も良い注解は、ローマ15章にある彼自身による計画の議論を参照。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』(いのちのことば社)、F・F・ブルース『使徒行伝』(聖書図書刊行会)、Polhill, J.B., Acts (Broadman)。

聖書 使徒19・11～22

タイトル エペソ宣教（イエス様の力）
暗唱聖句 このようにして、主の言はます
ます盛んにひろまり、また力を
増し加えていった。使徒19・20目標 悪霊との戦いに勝利したエペソ
宣教に学ぶ。

導入

（光田）

み言葉やイエス様のことを良く分かせてくださるのは聖霊なる神様です。それと反対の働きをする悪霊がいることも本当です。今日は、悪霊の働きに勝利する道を学びましょう。

イエス様のみ名

パウロの旅はエペソまで来ました。そこで2年間伝道に励んだので、その地方の人たちは皆、主の言葉を聞いていました。そのころパウロをとおして神様の力が非常に強く働いて、不思議なことが次々と行われていました。たとえば、パウロが身につけていた手ぬぐいやエプロンを、病氣の人に当てると、その病氣が治ってしまい、悪霊までも出て行ってしまったのです。このような出来事を見たり聞いた人たちはみんな、イエス様のお名前の力にびっくりしていました。

そこにユダヤ人のまじない師たちがいました。彼らはパウロが不思議なわざを行っていることを知って、自分たちも同じようにイエス様のお名前を使ってみようと考えたのです。そして、悪霊につかれている人に向かって、「パウロの宣べ伝えてくるイエスの名によって命じる。出て行け」と言

って試してみました。ユダヤ人の祭司長でスケワという人の7人の息子たちも、同じようにイエス様のお名前を使っていたのです。

すると、どうでしょう。悪霊がイエス様のお名前を使って試している人々に向かって「イエスなら自分は知っている。パウロも分かっている。だが、おまえたちはいったい何者だ」と言い返してきたのです。そして悪霊につかれている人が彼らに飛びかかり、押さえつけて負かしてしまつたのです。傷を負わされた人たちは、怖くなつて裸のまま慌ててその家から逃げ出して行きました。悪霊はイエス様やパウロを知っているとはつきり答えています。しかし、イエス様を信じていないのに、ただ利用するだけの軽い気持ちでイエス様のお名前を使うのは、かえって悪霊から攻撃されることになるのです。

悔い改め

悪霊の反撃の出来事が、エペソにいる全てのユダヤ人やギリシヤ人たちに伝えられました。そして、このニュースを聞いた人々の間に、神様に対する大きな恐れのおこりが出てきたのです。そしてイエス様のお名前は、尊ばれるようになっていきました。

この事件の後、イエス様を信じるようになった人たちが大勢やつてきて、自分たちのしていたことを告白して、ごくごく悔い改めを始めた。それから、魔術を使っていた多くの人々は、魔術の本を皆持つてきて、火の中に投げ込み、焼き捨ててしまいました。その本代はお金になると銀で5万という、大変高価なものだったそうです。

イエス様が悪霊よりもはるかに強い本当の神様であることが、よく分かったのです。この悪霊事件は、この町の人々に大きなショックを与えましたが、多くの人が悪霊から離れるよいチャンスになりました。

まとめ

悪魔は自分がイエス様に勝てないことを知っているので、イエス様を恐れています。そしてイエス様を信じて従っているパウロのことも良く知っていました。イエス様を信じているなら、悪魔に負けることはありません。私たちは自分の力で悪魔に勝つことはできません。私たちはイエス様に守っていただく必要があります。

イエス様は悪魔のわざを滅ぼすためにこの世に来てくださり、悪魔に一人で立ち向かわれました。そして、イエス様は十字架で死なれ、よみがえられた救い主です。悪魔はイエス様に完全に負けてしまいました。このイエス様が誰よりも強い私たちの味方です。

聖書では占いは禁じられています。今は占いのブームで、テレビや雑誌では毎日いろんな運勢を占っています。お菓子の袋にも占いが付いていることがあります。神様に嫌われるものを信用して、悪魔の巧みな誘いにのらないように注意しましょう。私たちを愛してくださる、何者よりも強いイエス様に従いましょう。お祈りのときにも、イエス様のお名前を大切にお呼びしましょう。

♪十字架わが力♪

（友よ歌おう40）



牧羊ひろば



「子どもたちを
イエスさまのもとへ」

札幌羊ヶ丘教会

札幌羊ヶ丘教会の教会学校は今年で46周年になります。美園において教会が設立され伝道が始まりましたとき、伝道の柱となつたのが、家庭集会和教会学校でした。六、七人の主婦たちが集まり互いに学び合つて(まだ牧羊者を使つていません)でし子どもたちに伝道したのです。

お話は上手でなくとも「イエスさま大好きおばさんたち」は、子どもたちになんとかイエスさまのことを伝えたいという迫力満点でした。その頃の教会学校では、一番前に座ると(畳部屋でした)おばさんたちのつばが飛んでくると言われたものです。

そのおばさんたちのつばを浴びた子どもたちが今、伝道者となり、羊ヶ丘教会の役員また、壮年会、婦人会で活躍しているのです。もちろん教会学校教師の中にもいます。そして、やはり子どもたちのひんしゆくを買つたとしても、つばを飛ば

して大好きなイエスさまを伝えたいと思つているのです。

一、教会学校(日曜日午前9時半から)

① 礼拝を大切にします

主にクリスチャンホームの子どもたちが中心です。礼拝、分級というように46年続いたスタイルを守り、子どもたちに礼拝することの大切さを語り、見せています。教案は牧羊者を使い、どの教師もよく学んでいます。

神の前に畏れつつ、敬虔に出る礼拝を心がけており、30分の礼拝の時間をとても大切にしています。まず、教師が良き礼拝者でありたいと思つています。

② 分級は楽しくします

幼稚科、低学年、高学年、ジュニアの四つのクラスに分かれ、礼拝後分級をもちます。出来るだけ会話の多い楽しい分級にしようと、ワークを用いたり、色々工夫しています。

大人の礼拝の前とは限られるのですが、月1度は行事を持つようになっています。「ありがとう工作会」(父の



教会学校 イースタービデオ会



サタディチャーチ
羊ヶ丘スノーフェスティバル

日、母の日に「ビデオ会」などです。イースターの時には「たまごさがし」「朝食会など」をします。昨年はダチヨウのたまごで、ゆでたまごとスクランブルエッグを作りました。クリスマスシーズンには「クリスマス工作会」「キャンドルサービス」「キーパーティー」などをします。特別行事で冬は教会の裏で「雪あそび」もします。

③ 信仰に導きます

クリスチャンホームの子どもたちが多いので、教師会で祈り、洗礼を受けるように導いています。小学校高学年、中学生で信仰の決断ができるよう、特に夏のキャンプに参加して導かれた子どもたちと、分級などでさらに一緒に話すときを持ちます。ほとんどのクリスチャンホームの子どもたちは洗礼を受けることができました。

二、サタディチャーチ(月2回、土曜日)

① 未来を切り拓く

打たれ強い子どもたちをめざして学校週五日制が導入されたとき、子どもたちが土、日をどのように過ごすか学校、家庭、地域で

ずいぶん話し合われていました。教会で何かできることはないかと、教師会では1年かけて話し合い、立ち上げたのがサタデイチャーチです。毎年3月、地域へ案内を配り、申込みを受け付けます。保護者の了解を得るためです。今年で5年目になりました。日曜日の教会学校とは違う子どものためのプログラムを作り、み言葉を語るばかりでなく、子どもたちのいろいろな成長を促すものを組み込みました。「未来を切り拓く、打たれ強い子どもたち」を育てるのがねらいです。始めた頃（ころ）、地域における学校週五日制の取り組みとして、北海道新聞のこども新聞記者が取材に来られました。

② 霊的な時間（30分）

ゴスペルタイムは、元気の出る賛美を歌います。しっかりと練習しますのでサタデイチャーチに来ている子どもたちはよく歌います。おはなしタイムは、フランネルのキリスト伝紙芝居による旧約聖書物語、新約聖書物語をしています。ポイントとなるみ言葉をしっかりと語り込んでいくときです。

③ 交わりタイム（1時間）

子どもたちがいろいろな経験を幅広くできて、楽しいプログラムを心がけています。2005年度は「フレッシュアップ大会」「君もなれるパン屋さん、じゃパンX号」「本格派工作会」「トライ、スイカ作り」（スイカの苗植え）「ソーラーボールン」「まーちゃんとおも



レインボーシープ お花を植えよう

いつきり鬼ごっこ」「地球のひみつ・津波」など22回いたしました。

④ 多くの人たちで支えています
多彩なプログラムをめざして、いろいろな方が奉仕、ボランティアとして協力してくださいませ。パンのときには、パン作りの得意なお母さんに来ていただきました。スイカ作りは畑の大好きなおばあちゃんに来ていただきました。ついでにじゃがいもも植えてあとで収穫し、いももちを作ったわけです。まーちゃんは子どもと遊ぶのが大好きなおじさんです。大人の方の賜物が用いられるときとなっています。

三、レインボーシープ（毎週土曜日）

教会学校分校のサタデイチャーチ版です。信徒の方の家を一部屋お借りして始めました。3年目になります。4人の姉妹たちが祈りの中でよく準備して、子どもたちと過ごしています。

最初、教会の皆さんと案内を配り、3人ほどの子どもたちからスタートしましたが、口コミで少しずつ増えてきました。今は時には10畳の部屋いっぱい集まります。元気の良い子どもたちで、賛美が大好きです。

四、夏のキャンプ

夏の子どもたちのキャンプは、教会あげて力を入れています。そのために1年かけていつも準備しています。プ



2005年 夏のCSキャンプ

ログラムのためには何回も話し合い、教案の学び会もします。とにかく目標は救霊です。口コミで地域にも広まり、多くの子どもたちが参加しています。昨年は、「ゲームチャンピオン」「クッキングコンテスト」で盛り上がり、「ハートタイム」で子どもたちと個人的に祈りました。子ども、スタッフあわせて80名の参加があり、恵みのひと時でした。

（小菅香世子）

3月27日(月)

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

3月28日(火)

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

3月29日(水)

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

3月30日(木)

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

3月31日(金)

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

4月1日(土)

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

ヨハネ12：1～3
ヨリヤは高橋で神妙なアルドの書物
一行を持ってきて、イエスの前にぬり、
自分の髪のもでそれらにいた。3節

みなさんからの
声をお待ちしています。

☆

☆

☆

あなたの教会では、『子ども聖書日課』
をどのように使っていますか？
例：●一週間もしくは一ヶ月にまとめ
て配布。
●家庭礼拝に使用。
●教師が聖書から質問を付け加え
て配布。
『子ども聖書日課』を使用して、気づい
たことはありませんか？
その他。
(使っていてよかったなと思うこと、
エピソード、など。)

連絡先

(有)ベラカ出版

〒652-0804
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話：078-575-5572
FAX：078-575-5582
E-mail：berachah@vanilla.ocn.ne.jp

おわりに

『牧羊者』二〇〇六年度第Ⅱ巻をお届けできますことを感謝します。執筆の方々には、転任や聖会などの中、執筆していただき心から感謝いたします。前号から一色刷り、ワーク解説は別刷りで付録となっておりま。また、「教師養成講座・旧約聖書丸ごと早わかり」を、鎌野直人先生が執筆してくださいました。そして、好評の「子ども聖書日課」を、各教会で印刷しやすいように組み換えております。大いに用いください。

今後も「牧羊者」が大いに用いられ、各教会の教会学校が祝福されるように、引き続きお祈りください。終わりに今号の執筆者を紹介します。

聖書講解 鎌野 善三 金井 望
研究資料 足立 宏 石田 高保
メッセージ例 松浦みち子 小野 淳子 光田 隆代
ワーク 木村 純子 鎌野 幸 長谷川ひさ
長尾 秀紀 加藤 清 上森 恭子
藤井 洋美

中 高 科 小岩 裕一
ラッソカード 土屋 直子
み言葉カード 陰山 恭子
子ども聖書日課 小野 淳子

また、監修をしてくださった鎌野善三師、小岩裕一師、光田隆代師、打ち込みをしてくださった、小岩喜代美師、藤井正子師、楠淳子師、陰にあつてお手伝いくださった兄弟姉妹の方々、また、発送とワーク印刷をされたベラカ出版の方々、印刷会社のアクトと菱三印刷に心から感謝いたします。(長谷川和雄)

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇〇六年度 Ⅱ巻

二〇〇六年六月十日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団教会学校局
企画監修 ベラカ出版
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 〇七八-五七五-五五一一
FAX 〇七八-五七五-五五一一
印刷所 菱三印刷株式会社
電話 〇七八-五七六-三九六一
*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み